



edited by dr. masato mugitani
published by masquerade cooperation

part III no.6-no.10

COMPILED COLOUR EDITION

january 2003

限定30部のうちの10/30

目 次

No. 6

スローモーション・サンドイッチ	73
2つのビル・イン・レモン補足	79

No. 7

ピンで留められたカード	87
ユリ・ゲラーのメンタル・マジック	97

No. 8

21枚カード・トリック	101
「金庫」のひとつの使い方	107
最近の手品用具について(予告)	114

No. 9

オープン・プレディクション物語	115
スワミ・ギミックについて	123

No. 10

ひっくり返るカード	129
左手の枚数(コイン当て)	136
最近の手品用具について	140



edited by dr. masato mugitani
published by masquerade cooperation
part III no.6, september 2002

スローモーション・サンドイッチ

麦谷眞里

(はじめに) 久しぶりに、**MASQUERADE**らしいカード・マジックを探り上げます。サンドイッチ・イフェクトというのは、すでにカード奇術でも一分野を画していて、これに、「コレクターもの」を加えれば、相当な種類と数になります。言うまでもなく、客の選んだカードが、あらかじめ準備された特定の2枚のカード(エースとか黒のジャックとか赤のクィーンとか)によって挟まれて出てくるのがサンドイッチ・イフェクトです。解説によっては、「探偵カード」などと呼称されていて、探偵(2枚の黒のジャックやキング)が犯人(客のカード)を探し出してくるという演出になっているものもあります。

通常、この2枚は表向きで扱うことが多く、表向きの2枚のカードの間に、いつのまにか、裏向きのカードが1枚挟まれて出てきて、そのカードが、まさしく客の選んだカードだったというわけで、視覚的にもなかなか効果的な手品です。

さて、今回取り上げる、「スローモーション・サンドイッチ」というのは、あらかじめ用意しておいた2枚のカード(ジャックやクィーン)に突然客のカードが挟まれて出て来るのではなくて、最初は10数枚のカードがサンドイッチされ、次に数枚になり、サンドイッチされているカードの枚数が徐々に減って行って、最後には1枚になり、その1枚を表向きにすると客のカードである、というものです。

すなわち、サンドイッチされて1枚に絞り込まれていく様子がスローモーションで見せられる、という現象です。

1. ラリー・ジェニングス

しかしながら、そのものずばりの、段階的なサンドイッチの現象の手品を行なうのは、実は容易ではありません。典型的なものは、ラリー・ジェニングスの”THE SEARCHERS”と名付けられた作品で、リチャーズ・アルマナックの1984年17-18号「ラリー・ジェニングス特集号」に載っています(p172-p174)。でも、この解説を読むとイヤになります。たとえば、解説に出てくる技法を順に列挙すると、次のような技法が次々と必要になります。

- ①グリンプス(ハリー・ローレインの「ベスト・オブ・フレンド」の501ページのもの)
- ②ターンノーバー・パス
- ③インパーセティブル・ゲットレディ(クリフ・グリーン「プロフェッショナル・カード・マジック」の16ページのもの)
- ④マルチプル・ボトム・スティール(リチャーズ・アルマナック16号に掲載されたマイク・スキナーの「センチメンタル・エーセス」に解説してある方法)
- ⑤ホフジンサー・カル
- ⑥ワン・カード・カバーパス
- ⑦ブロック・センター・パス
- ⑧バーノズ・ウエッジ・ポジション(モア・インナー・シークレットの22ページを見ろ、と書いてあります)
- ⑨これに使うパスのいろいろなやり方については、ケン・クレンツェルのクラシック・カードマジックを参照しろ、と最後にコメントしてあります。

いかがですか？練習する気になりますか？

これを読んだときの私の感想は、これだけ技法を駆使すれば、なんだってできるだろう、というものでした。何も、スローモーションでサンドイッチ・カードを見せるために、こんなに苦労することはないという印象でした。おそらく、ラリー・ジェニングスは上手に演じることができるのでしょう。しかし、見せられた客の反応が、演者の苦労に比例しているかどうかは、甚だ疑問です。

しかし、サンドイッチの過程をスローモーションで見せようという試みそのものは、なかなか捨てがたい味があります。ロイ・ウォルトン(!!懐かしいでしょう?)もきっとそう思ったにちがひありません。最近出た奇術専門誌”THE PENUMBRA”(「陰影」という意味です)の2号(2002年)にロイ・ウォルトンの「解決策」が載っていたので、演ってみました。これがなかなかいいのです。私は、こういう味の手品が基本的に好きです。

とりあえず、それを紹介してみます。

2. ロイ・ウォルトン

[現象]客の選んだカードが、2枚の赤のクィーンによって、徐々にサンドイッチされます。

[やり方]

- ①シャッフルしたデッキから赤のクイーンを2枚抜き出して、裏向きのデッキのトップとボトムに表向きで置きます(図64)。スーツはどちらがどちらでもかまいません。説明の都合上、トップをハートのクイーン、ボトムをダイヤのクイーンにしておきます。こういう手品を演るとき、どちらのスーツを上にするか気にする人がいますが、私(麦谷)は、けっこう大雑把で気にしません。実は、そのことは、あとから重要になってきて、ロイ・ウォルトンはそのためにカードを逆ファンに開いたりしていますが、私は、そのことにはまったく無頓着です。ただし、気になる方のために、説明は加えておきますからご安心ください。



図64

- ②デッキの状態をよく客に認識させたら、左手に持って、左上隅を左親指でリフルし、客に好きなところでストップをかけてもらいます。真ん中あたりがいいでしょう。ストップと言われたところで右手を上からかけてデッキを分け、左手の下半分のトップカードを客に差し出します(図65)。



図65

- ③客が、そのカードを覚えている間、両手のデッキを一旦揃えるかのように、右手の上半分を左手の下半分の上に戻しますが、このとき、完全に揃えてしまわないで、左手の下半分の上にステップを作るような感じで、右手の上半分を載せます(図66)。そしてこのとき同時に、左手の指先

を使って、ボトムダイアのクィーンだけを右へ押し出して、右手に持った上半分に揃うような位置まで滑らせます。図67は、これを下から見たところです。くれぐれも、ボトムダイアのクィーンの上端がデッキの下からはみ出たりしないように注意します。



図66



図67

- ④客がカードを覚えて返してもらいますが、これは、ダイアのクィーンより上の下半分のカード群だけをそのまま客のほうに差し出して、その上に返してもらうのです。結果として右手の上半分の下には、右側に突き出ていた表向きのダイアのクィーンが加えられることとなります。左手の下半分の上に客のカードを返してもらったら、その上に、ポンという感じで右手の上半分を載せます。そのまま、デッキはよく揃えてしまいます。
- ⑤いま、デッキは裏向きで、トップに表向きのハートのクィーンがあり、真ん中あたりに表向きのダイアのクィーンとその下に客の覚えたカードが来ています。ただし、客は、自分のカードがデッキの真ん中あたりにあり、トップとボトムに表向きの赤のクィーンがあると思っています。そのことを次のように客に言います。「あなたの覚えたランプは、この中のどこかにありますが、それをこれから、上と下に置いた赤のクィーンで探してみます」
- ⑥ここで、「ご覧ください」と言って、デッキの下から4分の1ぐらいのところにブレイクを作り、ただち

にそこからパス(!)を行ないます。え? パス? と驚かないでください。特定のカードのコントロールとしてパスを行なうわけではありませんから、いわゆる「見えないパス」を行なう必要はないのです。少しぐらいへたくそでもかまいません。しかし、とにかく、ここでパスを行なえば、一瞬のうちに、トップのハートのクイーンは客の視界から消えます。

- ⑦その位置でパスを行なうと、トップにあったハートのクイーンは消えてしまいますから、ただちにデッキを裏向きのまま両手の間に広げます(図68)。「上にあった赤いクイーンは下のほうに沈み、下にあったもう1枚の赤いクイーンは上のほうに上がって来ています。つまり、2枚で、あなたの覚えたトランプを探しているのです」と説明します。



図68

- ⑧デッキを広げながら、ハートのクイーンとダイヤのクイーンをやや上にアップジョッグします。そして、2枚のクイーンだけを突き出したまま、再びデッキを揃えますが、このとき、下のほうのダイヤのクイーンのすぐ下のカード(客のカード)の下に左小指でブレイクを作っておきます。デッキを閉じて揃えたら、まず、上のほうのハートのクイーンより上の裏向きのカード群をすべて右手で取ってテーブルの上に置きます。次に、右手で、左小指のブレイクから上のカード群をすべて取り上げます。左手には、ブレイクから下の裏向きのカード群だけが残ります(図69)。



図69

- ⑨左手に残った裏向きのカード群を、さきほどテーブルの上に置いたカード群の上に重ねて置きます。右手には、突き出た2枚の赤のクィーンを擁した PACKET が残ります。この PACKET を両手の間に広げて示します。くれぐれも、ダイヤのクィーンの下にカードが1枚あることを客に悟られないように注意します(図70)。「2枚の赤のクィーンの間には、まだこんなにたくさんのトランプがあります。この中から、あなたの選んだトランプを探さねばなりません」こう言いながら、PACKET を揃えます。突き出していたクィーンも揃えます。



図70

- ⑩「ご覧ください」こう言って、PACKET の真ん中あたりにブレイクを作ってパスします。そうです、パスです。もう一回行なうのです。そして、PACKET を広げると、なんと、2枚の赤のクィーンの間に1枚の裏向きのカードがサンドイッチされています。「やっと、見つけたようですね」そう言って、2枚のクィーンの間裏向きのカードをよく示します(図71)。このとき、2枚のクィーンの間が逆転していることに気づかれると思います。すなわち、下にあったダイヤのクィーンが上に来ています。しかし、そもそも、あんなに離れていた2枚のクィーンがくっついていて、しかも客のカードだけをサンドイッチしているということが不思議なわけですから、2枚の赤のクィーンの位置に拘泥する客などいないのではないか、というのが私の理屈です。



図71

- ⑪どうしても、2枚のクィーンの位置の逆転が気になる人は、パケットを広げるときに、インデックスが見えないように逆ファンに広げれば、それを防げます(図72)。いずれにしても、クィーンの間裏向きのカードを抜き出してから、客に覚えたカードの名前を訊いたのち、そのカードを表向きにひっくり返します。もちろん、客の覚えたカードです。



図72

3. コメント

サンドイッチ・イフェクトは、実は、2枚のエースを使うエドワード・マーローの方法が秀作です。(東京堂出版「カード・マジック事典」144ページ参照。私の解説です)マーローの方法は、あれだけ離れていた2枚のエースが、どうして一瞬のうちに重なって出てくるのか、不思議な感じがします。私も、初めて、高木重朗さんに見せてもらったときは、てっきりもう1枚、余分のエースを使っていると思ったほどです。手品をいろいろこねくり回していると、結局、昔のやり方が、一番よかったということが往々にしてあります。私は、上のスローモーション・サンドイッチがかなり好きですが、さきほども書いたように、客に見せた場合、これが、普通のサンドイッチ・イフェクトより不思議に見えるかどうかについては、ちょっと自信がありません。(M. M.)

2つのビル・イン・レモン補足

麦谷眞里

1. まえがき

MASQUERADE CLASSIC EDITION No.1「ビル・イン・レモン」の中で、言及はしたけれど解説しなかった手順が2つありました。ひとつは、スティーブ・スピルのもので、もうひとつはロバート・ハービンの手順です。そのうち、特にスティーブ・スピルのやり方についてはちょっとコメントを書いたものですから反響がありました。ただ、スティーブ・スピルの手順の種明かしは、そのときにも紹介しましたが、ドック・イーソンのビデオの中で行なわれています。フィンガーチップを使うことは書いたのですが、詳細は書きませんでした。ところが、なまじ「秀作です」とコメントしたもので

すから、フィンガーチップを使うとは、どんな方法かと問い合わせがありました。それは、もちろん、ドック・イーソンのビデオを見れば詳しく解説されています。スティーブ・スピルのやり方と微妙にちがいますが、基本的には同じものです。フィンガーチップを使って、ダイレクトに紙幣をレモンに入れる方法としては、これ以上のやり方はない、と言っても過言ではありません。

しかし、それを解説しても芸がありません。実は、スティーブ・スピルには、その原型ともなった、もうひとつの「ビル・イン・レモン」があるのです。それは、「アルティメイト・ビル・トゥ・レモン」という題で、ポール・ダイヤモンドから1980年に出た”The Spill Bar and Grille”という小冊子に紹介されているものです。それも、フィンガーチップを使いますし、レモンをあらかじめ袋に入れて観客のひとりに持たせておくなどの演出の骨格は同じですから、ドック・イーソンが習ったものは、それから派生してさらに洗練されたものだと言えます。しかしながら、1980年の段階のものは、ややマニアックなところがありますが、それなりによく考えてありますし、なかなか実用的です。そこで今回は、それを解説しておきます。

次に、ロバート・ハービンの手順は、クラシック・エディションの執筆当時、確かにあったはずのロバート・ハービンの本が、どうしても見つからなかったため、やむなく採り上げなかったのですが、ひょんなことから出てきたので、ここで簡単に紹介しておくことにしました。

2. スティーブ・スピルのアルティメイト・ビル・トゥ・レモン

[現象] 観客から借りて、サインされた紙幣が、自由に選ばれて、ずっと観客の手元にあったレモンの中から出現します。

[準備するもの]

- ① やや小さめのレモン 数個
- ② フィンガーチップ(図73) 1個

サムチップに比べて使用頻度は少ないですが、使い方によっては便利なものです。図73のものは、日本製で、1個400円です。人差し指にも中指にも使えます。後述するように、これでは小さ過ぎて日本の紙幣を入れるのは無理かもしれません。その場合はサムチップで代用します。



図73

- ③ナイフ 1本
- ④エッグ・バッグ(！もちろん手品用のエッグ・バッグです。大きなものや、柄物ではなくて、黒い小振りのものが適しています。マリーニのものがよいでしょう) 1つ
- ⑤1000円札 1枚
- ⑥クリップ付きのボールペン 1本
- ⑦ショット・グラス 1個

[セット]

- ①準備したものを次のようにセットします。まず、1000円札を半分に折り、それをさらに4分の1の大きさに折ります。そして、それをさらに半分に折ります。結局8分の1の大きさになります。形状としては、おおむね一辺3.5センチの正方形のようになります。それをボールペンのクリップに挟んで、上着の左ポケットに入れておきます。
- ②レモンの1個に直径1.5センチくらいの穴を開け、それをエッグ・バッグの中に入れておきます。秘密の隠しポケットではなく、エッグ・バッグそのものの中に入れておくのです。このように準備したレモン入りのエッグ・バッグを上着の右ポケットに入れておきますが、入れ方は、レモンの穴が上を向くようにして、その周りにエッグ・バッグの口を広げておきます(図74)。



図74

- ③ショット・グラスを、同じ上着の右ポケットに入れておきます。
- ④フィンガーチップは、ズボンの左上のベルトのところに挟んでおきます。
- ⑤残りの数個のレモンは、ボウルにでも入れてテーブルの上に置いておきます。ナイフもそのそばに置いておきます。

以上の「セット」を読んで、何もかも上着のポケットに入れておくことに疑問を感じる人がいらっしゃるかもしれませんが、しかし、数個のレモンとナイフはともかく、本来、この種の手品は、手ぶらで観客の前に登場してきて、そして演技が終わったら、また手ぶらで退場するものなのです。そうでなければ、いつでもどこでも演技するというわけにはいかないからです。

[やり方]

- ①観客から1000円札を1枚借ります。そのときは、観客に両手を大きく広げて、何気なく、両手が

空であることを示しておきます。1000円札を借りたら、それを一旦右手に持って、左手は、上着の左ポケットからボールペンを出します。もちろん、クリップに挟まれた紙幣は左手で隠してボールペンを出します。右手の紙幣を近くの観客に渡し、左手からはボールペンだけをその客に渡してサインしてもらいます。紙幣を貸してくれた客にもサインを促します。クリップの1000円札は、折り畳まれたまま左手にフィンガーパームしています。

- ②サインしてもらった紙幣は、左手にフィンガーパームしている紙幣と同じように折り畳みます。いま折り畳んだばかりの紙幣を右手の親指と人差し指、中指の先に持って(図75)、これを左手に移すかのようにして、実際は、親指で右手に引き、左手は、フィンガーパームしていた紙幣を、同じように左親指と人差し指、中指の先に押し出します(図76)。これは、ことさらむずかしい動作ではありません。これから右手で上着の右ポケットに入っているショット・グラスを取りに行くために、右手の紙幣を一旦左手に渡すのです。そういう気持ちで、右手の紙幣を左手に渡す動作を行なうのです。

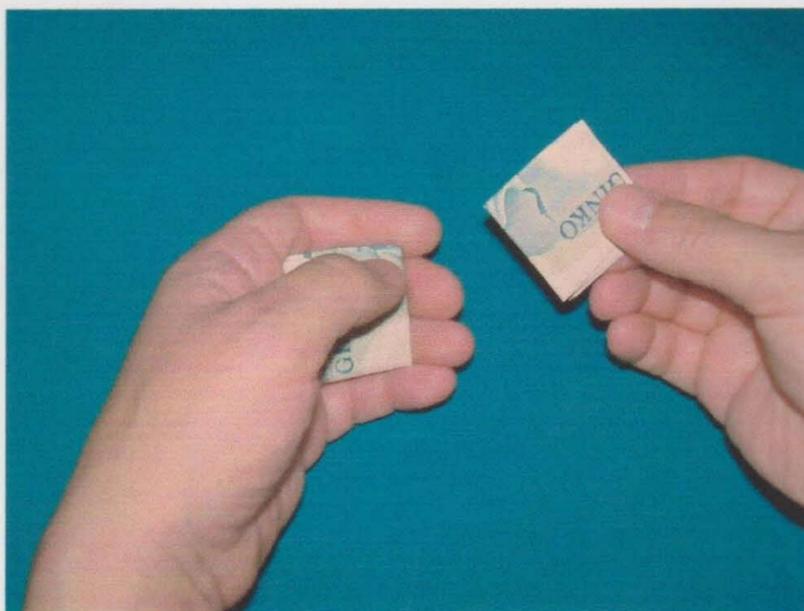


図75

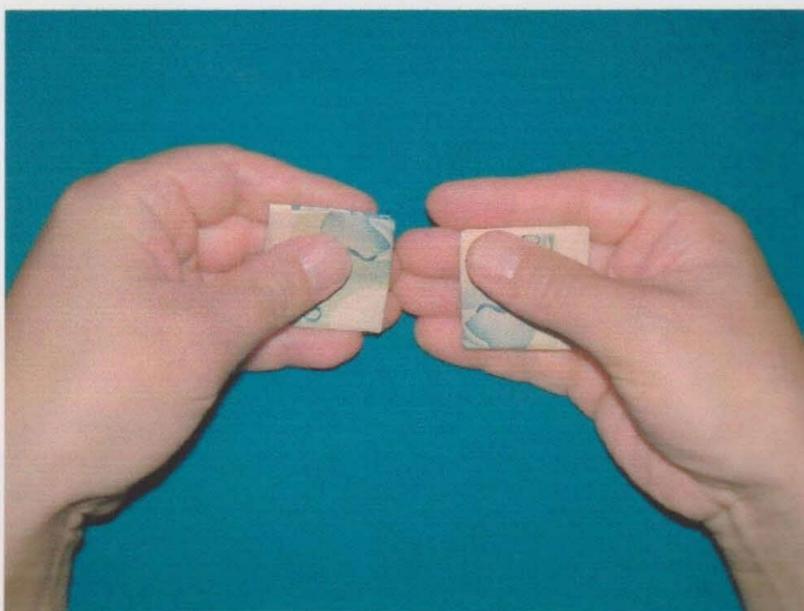


図76

- ③フィンガーパームしていた1000円札を左手の指先に持って示しながら、右手は、サインされた紙幣をパームしたまま上着の右ポケットに入れて、ただちにこの紙幣を穴の開いているレモン

の中に押し込み、間髪を入れずショット・グラスを取り出してきました。そのまま、左手の紙幣をテーブルの上に置いて、その上に、右手のショット・グラスを載せます。

- ④この段階で、再び両手は空です。女性の観客の一人に、ボウルの中のレモンを1個、任意に選んでもらいます。ついでに、ハンドバッグの中にレモンを入れるスペースがあるかどうか訊ねます。スティーブ・スピルの最近のバージョンでは、ハンドバッグは必須ではありませんが、この手順では必須ですので、スペースがないという応答があったら、ほかの女性客に変えます。
- ⑤選ばれたレモンは女性客に持っていてもらいます。右手を上着の右ポケットに入れて、紙幣を入れたレモンを隠しポケットのほうに入れながらエッグ・バッグを取り出します。裏表を簡単に改めて見せてから、女性客に、持っているレモンをエッグ・バッグの中に入れてもらいます。叩いたり絞ったりという本格的なエッグ・バッグの改めを行なう必要はありません。レモンを落とし込んだら、エッグ・バッグを女性客のハンドバッグに入れて、口をしっかりと閉じてもらいます。
- ⑥以上の動きの間に、左手をズボンの左上に当てて、左中指にフィンガーチップをつけます。右手でショット・グラスを持ち上げて、紙幣を取り上げます。両手の甲を観客のほうに向けて紙幣をフィンガーチップの向こう側(観客側)になるように保持します。そのまま、一旦、紙幣とフィンガーチップを右手に引いてとります。左手で紙幣だけを引き戻して、これをフィンガーチップの中に左中指で押し込みます。左手を抜きながら、両掌を観客側に開くようにして見せると、紙幣が消えたように見えます(図77)。こう書くと、簡単そうに思えますが、実はアメリカの紙幣とちがって日本の紙幣は固くて頑丈で、すんなりと小さなフィンガーチップには入ってくれないのです。したがって、日本の紙幣で行うときは、大きめのサムチップのほうがいいかもしれません。

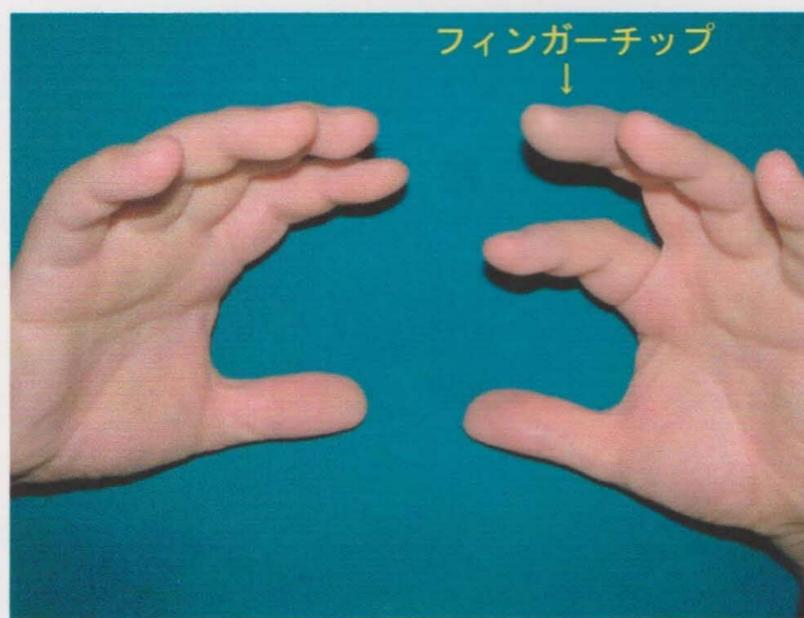


図77

- ⑦ハンドバッグの女性客にハンドバッグを開けてもらいます。右手で中のエッグ・バッグを取り出します。これを左手に渡して、右手で、中から紙幣の入っているほうのレモン(穴が開いている)を取り出します。女性客の選んだレモンはエッグ・バッグの中に残ったままです。右手にレモンを掲げますが、穴は親指で塞いでおきます。左手は、持っているエッグ・バッグを上着の左ポケットにしまいます。同時にフィンガーチップ(サムチップ)もおいてきます。
- ⑧ナイフを取り上げて、レモンを水平軸で切り、中の紙幣を示します(図78)。これを、紙幣を貸し

てくれた観客に取り上げてもらい、サインを確認して終わりです。

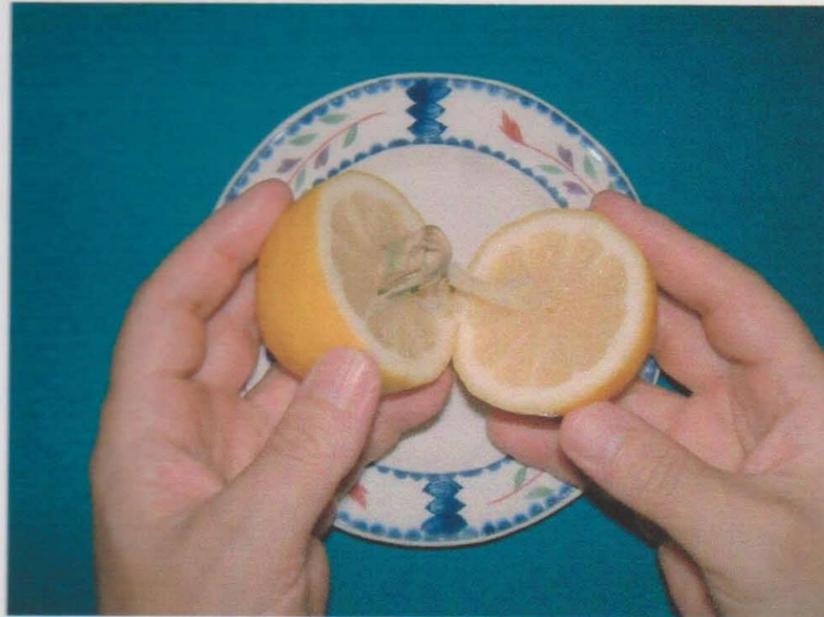


図78

3. 実際のステージで

スティーブ・スピルが、実際にステージで演っている最近のやり方は、さらにダイレクトなものになっています。レモンは1個しか使いません。デュプリケイトの紙幣もエッグ・バッグも使いません。女性客のハンドバッグも使いません。レモンは、少し周到に準備されていて、さすがに穴は開けられています。穴そのものは、上手にカバーされています。

そのレモンを、演技の最初に普通の黒いバッグ(エッグ・バッグではありません)に入れて、観客のひとりに持っていてもらいます。デュプリケイトの紙幣を用意する必要がないので、借りるお札は、10ドル札でも100ドル札でも何でもよいのです。それも大きな利点のひとつです。

折り畳んだ紙幣は、鉗子のようなものに挟み、これも観客のひとりに持っていてもらいます。驚くのは、紙幣をまったくスイッチしないことで、最後の最後まで、観客に紙幣のサインを確認させます。紙幣は、フィンガーチップで消しますが、このフィンガーチップの紙幣を、そのままダイレクトにバッグの中のレモンに入れて取り出すのです。初めて見るとびっくりしますし、ひっかかります。おそらく、1980年くらいのときには、今回解説したように、エッグ・バッグを使って演技していたのですが、そのうちに徐々に、そのような直接的な方法に変化したものと推察されます。

フィンガーチップの使い方も、スティーブ・スピル自身はそんなに神経を使っていなくて、左右は逆ですが、チップを握った左手に、そのまま紙幣を入れて、右手の中指を押し込んでいます。このような方法だったら、サムチップでも十分にできると思います。ただ、サムチップの場合は、レモンの中への入れ方にはひと工夫が必要です。

4. ロバート・ハービンの手順

私が参照にしたのは、エリック・ルイスが書いている”Genius of Robert Harbin”です。ちなみに、エリック・ルイスの文章は非常に読みやすいです。ルイス・ギャンソンも読みやすいです。これに反して、昔出ていた”Magic Manuscript”のコラムの文章は、私には非常に読み辛いものでした。文

章でコミュニケーションを図る以上、これは、英単語の語彙の問題ではなく、やはり、執筆者の能力の問題だと思います。

なぜ、そんなことをわざわざ書いたかというと、”Genius of Robert Harbin”の記述は、2ページ半のきわめて簡単なものであるにもかかわらず、ロバート・ハービンの演技を彷彿とさせますし、要所要所の説明は、非常に的確なもので感心したからです。

[現象]

客の紙幣と選んだカードとが、レモンの中から出てきます。

[準備]

- ①デュプリケート・カードが必要です。2枚のうち、1枚はデッキのトップに、もう1枚は、そのカードでサムチップを作ります(!)。まず、カードを縦方向に3つ折りにして、筒になったカードの一方の端を少し折ります。折ったら、その部分を輪ゴムで留めます。これで、カードのサムチップができました(図79)。

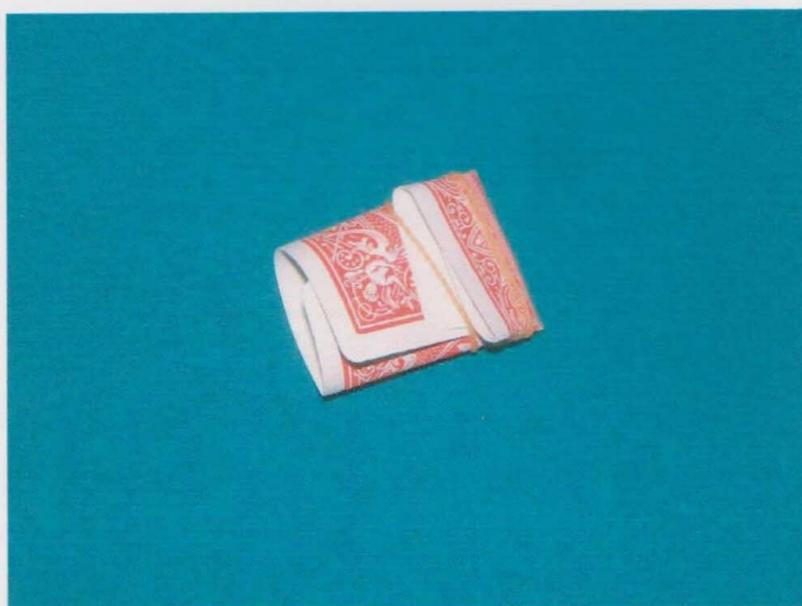


図79

- ②紙幣大のフラッシュ・ペーパーを用意して、それを短い端のほうから、カーペットを巻くようにして小さくします。フラッシュ・ペーパーがなければ、普通の白い紙でもかまいません。それを洋封筒の底に入れて、さらにその上に、サムチップ・カードを入れておきます。
- ③レモンは、穴を開けたものをズボンの右ポケットに入れておきます。あと、普通のハンカチーフを上着の左胸ポケットに入れておきます。

[演技]

- ①まず、観客から紙幣を借ります。借りた観客に、番号を控えてもらいます。サインはさせません。なぜなら、あとから選ばせるカードにもサインさせないからです。紙幣は、封筒の中に用意したフラッシュ・ペーパーと同じように端から巻いて右手に持ちます。封筒を左手で取り上げて、封筒の上から左手でサムチップ・カードを押さえます。この「サムチップ」の中に右手の紙幣を押し込みます。押し込んだ親指をそのまま「サムチップ」に入れて、封筒を右手に持ちます。この状態で、宛名を書くほうの面を観客に向けて封筒を差し出し、前方の客のひとりに、封筒の上から紙幣(実際はフラッシュ・ペーパー)に触って確認してもらいます。そのまま、封筒と紙幣をしっかりと

持って手を高く掲げていてくれるように客に頼み、右手を封筒から離します。もちろん親指には「サムチップ」がついていますから、それは他の指で見えないように隠します。封筒のフラップは開けたままになっていますが、この段階で手を下ろして中を覗いて紙幣を点検する客はいません。

- ②このまま、ただちに右手をズボンのポケットに入れて、紙幣と「サムチップ」をレモンの中に押し込んでからレモンを取り出します。同時に、左手は、上着の胸ポケットからハンカチーフを取ります。両方の動きを同時に行なえば、レモンの取り出しに少しぐらいもたついても大丈夫です。レモンをハンカチーフに包みますが、包んだハンカチーフの端を捻って、しっかりと包まれていることを確認したら、別の客に渡して持ってもらいます。
- ③デッキを取り上げて、トップにセットしてある、「サムチップ」のデュプリケート・カードを新たな客にフォースします。このカードと封筒を、金属製の皿の上で燃やします。最後に、ハンカチーフからレモンを取り出してナイフで輪切りにし、中から、紙幣とカードとを出すのです。

5. コメント

これで、当分、「ビル・イン・レモン」の補遺は扱いません。ロバート・ハービンの手順は、いい手順ですが、やはり古典的な感じがします。スティーブ・スピルのも、現代的でいい手順ですが、実際の演技を見た感じでは、ちょっと乱暴な印象です。評価はむずかしいものです。(M.M.)

masquerade の予約購読制度導入について

なんとか定期的に刊行できそうな雰囲気ですので、**masquerade** 本誌を、定期購読ではなくて、「予約購読制」にしようと思います。事前にお金を受け取ることなく、購読を予約された方々に限定100部のうちの番号をあらかじめ確保し、発行のたびごとに注文がなくてもお送りする方式です。もちろん購入されなくても自由ですが、その場合は、番号の権利を失います。いかがでしょうか？とにかく、前もってお金をいただくことだけはやめたい、と思っています。

そこで、**masquerade** 本誌の「予約購読」を希望される方は、Eメールもしくは、はがきでお申し込みください。折り返し、「あなたの予約番号は、限定100部のうちの00/100番です」と書いた紙をお送りいたします。発行のたびごとに、この番号の **masquerade** 本誌を自動的に送付いたします。支払いは、雑誌が届いてからですし、購入の義務はありません。購入しない場合は、その旨お知らせ願えればけっこうです。その時点で、番号は、別の方に引き継がれます。

不幸にして、100番を超えて申し込まれた方は、ウェイティング・リストに載せ、その方には、ウェイティング・リストの何番目であるか、順番をお知らせしますし、別冊等の案内は差し上げます。

連絡は、郵便かメールでお願いします。(2002年9月)

郵便の送付先: 〒142-0064 東京都品川区旗の台3-15-1-208 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com



edited by dr. masato mugitani
published by masquerade cooperation
part III no.7, october 2002

ピンで留められたカード

麦谷眞里

[現象]観客は、デッキの中から1枚のカードを選んで、それにサインをします。演者は、そのカードをデッキの中に入れてシャッフルしますが、サインした客のカードは、いつのまにか、演者の上着の内側に大きな安全ピンで留められています。そのカードを安全ピンからはずしてサインした客に確認してもらいます。まちががなく客の選んでサインしたカードです。

[考察]今回は、冒頭に[現象]を置いてみました。それにしても、こういう[現象]の記述は、奇術用具の広告宣伝文句と同じで、タネが類推できるような言い方は意識して避けて書く傾向があります。上の内容にも基本的に嘘はありませんが、巧みに本当の動きが隠してあります。

まず、なぜ、こんな奇術を考えたか、というところから入ります。いまから20年前の1982年に刊行された、"THE TIPNICIAN"という60ページぐらいの薄いハード・カバーの本があります。値段は20ドルでしたが、当時は1ドルが280円ぐらいしていましたから、決して安い本ではありません。タイトルから想像できるようにフィンガーチップを使った手品がいくつか解説されています。書いたのは、「オイル・ライターに入るコイン」という手品を考案した Bob Chesbro という人で、この人

は、”Tricks You Can Count On”という有名なカウントの本を書いた Verne Chesbro の甥です。この本の中に、なぜか、フィンガーチップを使わないカードの作品がふたつだけ収められていて、そのうちのひとつが、「帽子の中のカード」というものです。

この変哲もないタイトルのカード・マジックが私の関心を惹きました。現象は、観客のサインしたカードが、マジシャンの被っていた帽子の内側に安全ピンで留められて出てくる、というものです。なかなかショッキングな現象ですが、カードはフォースです。カードをフォースするのなら、始めから帽子に安全ピンで留めておけばいいわけで、途端に興味がなくなります。しかしながら、客の選んだカードにサインさせるというところがミソで、フォースするのにサインさせるということは、もちろんそうしなければならない理由があるのです。要するに、フォースするカードにはすでに大きな安全ピンが付いていて、その部分を隠して観客にサインさせます。したがって、客にサインさせる体形に無理があります。普通、客の選んだカードにサインさせるのであれば、そのカードを抜き出して、ペンを渡してテーブルの上でサインさせるか、客に自分の席でサインしてもらいます。そうでなくても、演者の手元なら、せいぜい、デッキの上でサインさせます。ところが、この Chesbro の手品では、そのカードには、すでに大きな安全ピンが付いているので、そのような公明正大なことができません。いきおい、サインするほうも、させるほうも、なんとなく無理な姿勢で行ないます。

ただ、演出はよく考えられていて、帽子にも仕掛がしてあります。それでも、安全ピン付きの客のフォース・カードをパームしなければなりません。けっこう苦勞が多いのです。演技するとき、帽子を被っていないなければならないのも、わざとらしくて抵抗のあるところですよ。

それで、例によって、心にひっかかっていたものの、ずっと放ってありました。

この手品を構成している要素を分解すると、次のようなものです。

- ①観客にカードを選ばせる。
- ②そのカードにサインさせる。
- ③そのカードをデッキに戻してシャッフルする。
- ④客のカードは、演者がずっと被っていた帽子に安全ピンで留めて現れる。
- ⑤安全ピンをはずして客にカードとサインを確認してもらう。

この要素を検討するにあたって、最も重要な箇所は⑤です。安全ピンからはずして客にカードとサインを確認させる以上、少なくとも、それは、最初に客が選んでサインしたカードでなくてはなりません。そうでなければ、サインをコピーして(そういうギミックも世の中にはありますね)移す、というような面倒な作業が必要になります。この種の手品で、そこまでのことはやりたくありません。

Chesbro の解決方法は、安全ピン付きのカードをフォースして、それにサインさせるというものでした。これなら、あとは帽子に安全ピンで留められていたように見せるだけです。もちろん、それだっただけでひと工夫もふた工夫も必要です。

私は、もともと帽子で行なうのは実際的ではないと思っていましたので、帽子ではなくて、上着の背中の内側に安全ピンでくっつけているのはどうかと考えてみました。しかし、そもそも、演技の途中で上着を脱ぐという仕草もあまりスマートではない感じがして躊躇していました。その結果、二転三転して、上着の前を開けて、その内側に安全ピンでくっつけているのはどうだろうと思ったの

です。これなら、けっこうスマートですし、上着に安全ピンの穴の開くのが最大の欠点ですが、上着の内ポケットからワレットやレモンを取り出したりする動作と基本的には同じです。

次の課題は、どうやって、サインした客のカードを安全ピンで上着の内側にくっつけるか、でした。その結果、2つのやり方を考えました。ただし、いずれもハンドリングはまだ改良中です。

1. ちょっとマニアックなやり方

これを思いついたのは、リチャード・オスターリンドの”The Miracle Flying Signed Cards”を読んだときです。客のサインした3枚のカードが別々のところから出てくるこの作品は秀作です。そこに使われている原理は、日本ではなかなか実行しにくいものでしたが、なんとかそこを工夫しました。

[必要なもの]

- ①デッキ 1組
- ②デュプリケートの赤の絵札 1枚 (説明の都合上ダイヤのキングにしておきます)
- ③長さ7~8cm程度の大き目のサイズの安全ピン 1本 (これは、リンクング・ピンに使うような大きさのものが手頃です。カードの横幅は約6.4cmですから、それより少しはみ出るくらいの大きなものがよいです。巻きスカートの裾などを留める際に使われる「おしゃれピン」と呼ばれるものは、見た目にも綺麗で、通常の銀色のものばかりでなく金色のものも売っているため、こうした手品には適しています)
- ④黒か青の細字のボールペン 1本
- ⑤両面テープ 少し

[準備]

デュプリケートのダイヤのキングを用意します。まず、このカードの上方の白い縁に、用意した細字のボールペンで、適当な名前をサインします。漢字ではなく、ローマ字で横に書いておきます(図80)。この名前は、もし男性の下の名前なら、たとえば *Hiroyuki* などのように、できるだけ普通の名前で長めのものにしておきます。苗字でもかまいません。すぐにはっきりと判読できるようなものではなく、やや崩して、斜めに、まさにサインのように筆記体で書いておきます。

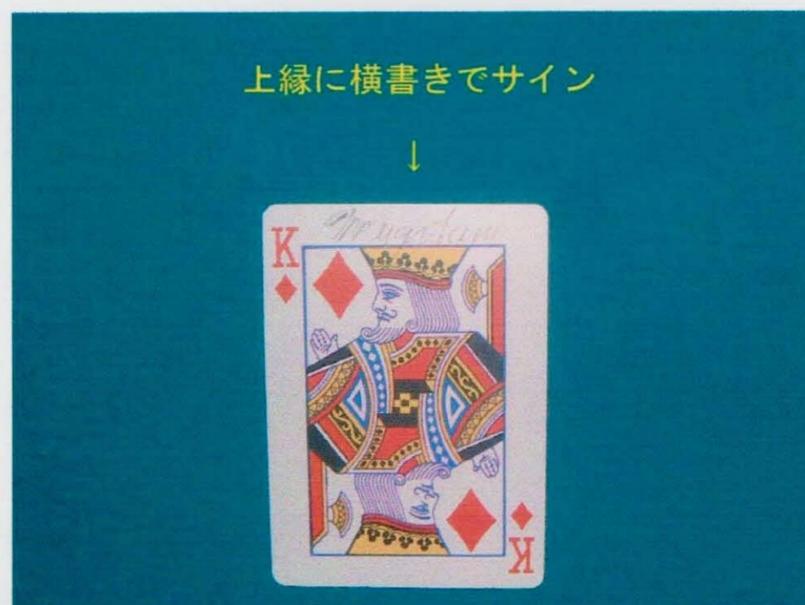


図80

次に、上着を左側に開いたときにちょうど見える裾の位置で、外側のポケットよりは、やや下になる裏側の位置に、両面テープを使ってこのカードをやや斜めにして縦にしっかりと貼り付けます(図81)。



図81

これは、ちょっとやさっとでは剥がれないように固定します。固定したら、このダイヤのキングを横方向に安全ピンで留めます(図82)。このとき、洋服側に刺した安全ピンの一部がほんのちょっと上着の外から見えるように突き刺します(図83)。外側に出た安全ピンの金色(もしくは銀色)の一部分に観客が気づくかもしれませんが、それはかまいません。この写真のものは金色です。



図82

この準備でわかる通り、これはフェイクです。最初に観客たちに上着の裏側のカードを見せるときは、このカードです。ただし、サインした本人に見せるのではなく、別の複数の観客に見せます。このとき、このサインが正しいかどうかは、書いた本人以外には、誰にも同定できません。もし、ステージや、パーティーなどで、演者が観客たちの席から離れたところで演じている環境なら、サインを書いた本人ですら、それが自分のサインであると錯覚してしまう場合があるほどです。

もう1枚のダイヤのキングの裏側には対角線上に鉛筆でドットをつけてデッキの中に入れておきます。ボールペンは、上着の胸ポケットにでも入れておきます。また、上着の前ボタンは留めてお

いてください。

[やり方]

- ①デッキをケースから出してシャッフルします。演者から見て左側の観客のひとりに向かい、「これから、あなたに1枚のトランプを選んでもらい、それにボールペンでサインをしてもらいます。そうすれば、そのトランプは、世界でたった1枚だけ、ということになりますね」と説明します。この説明で、観客は、52枚のうちどのカードを選んでも、自分がサインをすればいいんだから、と『カードを選ぶ』という作業に対する警戒心がなくなります。「まず、よく切ってください」と言って、デッキを、その左側の観客に渡してしまいます。これでますます警戒心がなくなります。
- ②観客からデッキを返してもらい、中央に戻ります。表が観客のほうを向くようにして演者の目の高さでファンに広げます。「ご覧の通り、すべて異なるトランプですし、これは52枚すべて揃っています」こう言いながら、裏から見て、ダイヤのキングのドットを探します。そして、このカードを、再び左側の観客にフォースします。クラシック・フォースでも、リフル・フォースでも、なんでもかまいません。このフォースは、前段の下準備が効いて、比較的、楽に行なえるはずで。
- ③客がカードを抜いたら、「私に見せないでくださいね。よく覚えて下さい」と言いながら、胸ポケットからボールペンを取り上げます。ここからのジェスチャーが大事です。デッキを左手に縦に立てて持ちます。客にボールペンを渡します。「このようにして、トランプの上のほうにあなたの名前を、苗字でも下の名前でも、お好きなほうを、ローマ字で書いてください」と言いながら、演者も、右手でカードの上端のあたりにサインするジェスチャーを行ないます。ダイヤのキングをフォースされた客は、サインのための白い場所が上の縁ぐらいしかないので、99%そこにサインします。演者は、客のカードが絵札だということを知らないはずですからくれぐれも言葉に注意して、「上の白い縁の部分に……」などとうっかり言わないように気をつけます。それから、客の手元を見て、ちゃんと、カードの上の部分にサインしているかどうかにも注意しておきます。もし、カードをちがう方向にでも持っていたら、自分のデッキのボトム・カードを示して、指先で上端をなぞりながら、「ここに、こんなふうサインしてください」と言います。しかし、ほとんどの場合、このような必要はありません。
- ④客がサインし終わったら、まず、ボールペンを返してもらい、それを胸ポケットにしまってから、次いで、カードを返してもらいます。そのカードはデッキの中に入れて、トップにコントロールします。カードを抜いた左側の客に向かい、「あなたが選んでサインしたトランプの名前は、忘れないでくださいね」と言います。
- ⑤こう言いながら、右側のほうに移動します。つまり、カードを抜いた左側の客からできるだけ離れるのです。「カードを当てるのには、いろいろなやり方があります。いま、急に、たとえば、スペードの5と言って、それが当たったら、それこそ超能力です。スペードの5でしたか？」やや遠くから左側の客に訊ねます。もちろん否定します。「私は、カードを当てるのに、安全ピンを使います。なぜなら、安全だからです」こういう冗談は、欧米では受けませんが、日本では受けません。こういうことを言いながらデッキのトップ・カードを右手にパームする準備をします。
- ⑥右側の観客に、上着の外側に出て光っている安全ピンの一部を指差して、「これがなんだかわ

かりますか？」と訊きます(図83)。客が何と答えようとも、「これが安全ピンです」と言って、まず右手は、トップ・カードをいつでもパームできる準備をしています。同時に、上着のボタンをはずして、左手で上着を左側に開けます(図84)。右側の観客には内側に安全ピンで留めてある表向きのダイヤのキングが見えます。左側の客からは、位置の関係でこれは見えません。そこで、左側の客に向かって、「あなたの覚えたトランプはなんでしたか？大きな声で言ってください！」と言います、客が、ダイヤのキングと言った途端に、右側の観客から歓声があがりますから、そこで初めて、左側の観客にも、上着の内側のダイヤのキングを見せます。ただし、遠くて、細字のボールペンで書いたサインの判読・同定はできないはずで。



図83



図84

- ⑦ここからも演技力が必要です。この安全ピンをはずすために、右手のデッキを左手に渡します。この瞬間に上着は再び閉じられます。ほとんど同時に、右手はトップ・カードをパームして、上着の中に入れ、ただちに、安全ピンに縦に入れてやや斜めに傾けてひっかけます。カードの幅は、約6.4cmですが、斜めにすれば、すぐに8cm近くの幅はとれますから、やや強めに挟めば安全ピンからは落ちません。左手にデッキを持ったまま、上着を持って安全ピンをはずそうとしたけどうまくいかなかった様子で、すぐに右手を外に出し、左手のデッキもテーブルの上かポケット

にしまって、両手を空にします。「安全ピンは、はずすときは、それほど安全でもないですよ」と言って観客を笑わせます。左手で上着と一緒にカードを押さえ、右手を上着の中に入れて、まず安全ピンだけをはずし、それを、パームで入れた本当のダイヤのキングに一回だけ突き刺します(図85)。これは、なかなかやっかいです。上着の中を見ながら、もちろん客には見せないで行ないます。突き刺したら、そのまま安全ピンを閉じないで上着の外に出します。本当は、こういう状態が出てくるのは不自然なのですが、観客はそうは思いません。このカードを、このままの状態ですべての客のところに持って行きます。歩きながら、上着の前ボタンを閉じます。



図85

⑧左手に安全ピンを持って、右手でカードをピンから抜き、サインした客に手渡して確認してもらいます。穴は1箇所しか開いていないのですが、それを不審に思われることはありません。

2. ダイレク的なやり方

次の方法は、呆れるくらいに直接的です。

[必要なもの]

①デッキ 1組(今度はデュプリケイトは要りません)

②左裏側の下方に小さなポケットのついている上着(図86)。



図86

- ③小さくて強力な磁石(ネオジウム・マグネットというきわめて強力なものが市販されています)
- ④針の部分先端から4cmほどカットした安全ピン(図87)。これを、カードの上に置くと、あたかも安全ピンがカードに刺さっているように見えます(図88)。したがって、もっと巧妙に作るには、針の先端の部分を接着剤でくっつけて、1cm程度残しておく、さらにリアルに見えます。ただ、この状態で観客に繁々と見せることはありませんので、単純にカットするだけでも十分だと思います。以下、この安全ピンをギミック・ピンと呼びます。



図87

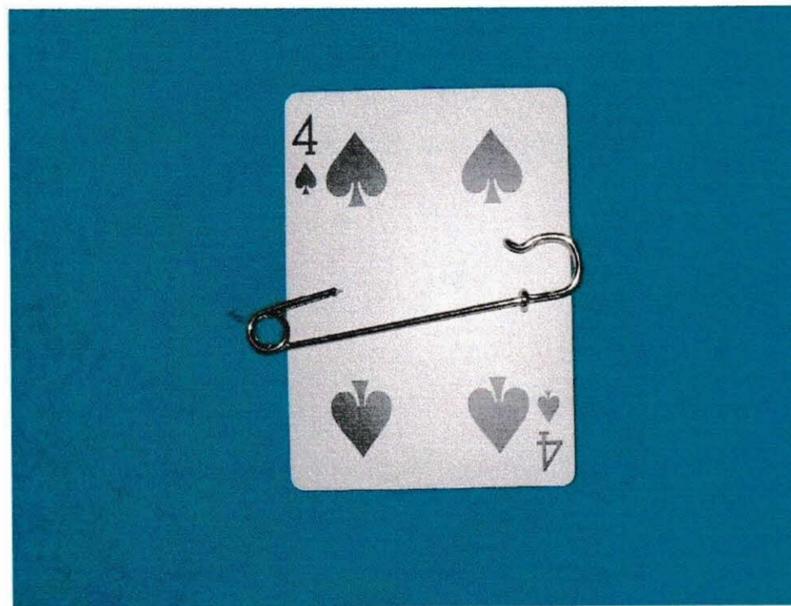


図88

- ⑤油性の黒のサインペン 1本。

[準備]

- ①今度は、フォースはありません。用意したギミック・ピンを上着の左ポケットに入れておきます。
- ②強力マグネットを上着の左内側の下方ポケット(図86)に入れておきます。もし、高さがうまく合わない場合は、不要なカードにマグネットをスコッチ・テープででも貼って調節しておきます。
- ③油性のサインペンは、上着の右ポケットに入れておきます。

[やり方]

- ①デッキをよくシャッフルします。観客にシャッフルさせてもかまいません。暗に両手が空であるこ

とを示しておきます。デッキを広げて観客のひとりに任意にカードを選んでもらいます。右手を上着の右ポケットに入れて、黒のサインペンを取り出し、選んだカードの表にサインしてもらいます。今度は、表いっぱいにはできるだけ大きくサインしてもらいます。マジシャンは勝手なものです。サインしたカードを返してもらったら、これを適当な方法でボトムにコントロールします。デッキは裏向きで左手に持ったままです。サインペンはまだ客の手にあります。

- ②デッキを裏向きで軽く広げ、「あなたのトランプは、この中のどこかにあります」と言って、閉じるときに、この動作の陰でボトムの客のカードだけをデッキのファンの陰で表向きにひっくり返します。ここで、思い出したふうにはデッキを右手で上から持って、空いた左手をさきほどの客に差し出して、サインペンを返してもらいます。このペンを上着の左ポケットにしまい入れて、その手で、ギミック・ピンをフィンガーパームしてきます。針の開閉する頭のほうが指先側です。
- ③ただちに、右手のデッキを再び左手に置きますが、このとき、ギミック・ピンを右手のボトム・カードの上に滑り込ませ、バネの支点部分の切れ端にボトムの客のカードの手前を向こう側からひっかけます(図89)。こうすることによって、デッキを右手で上からしっかり持てば、ボトムにある表向きの客のカードにギミック・ピンがある程度固定されて落ちません。

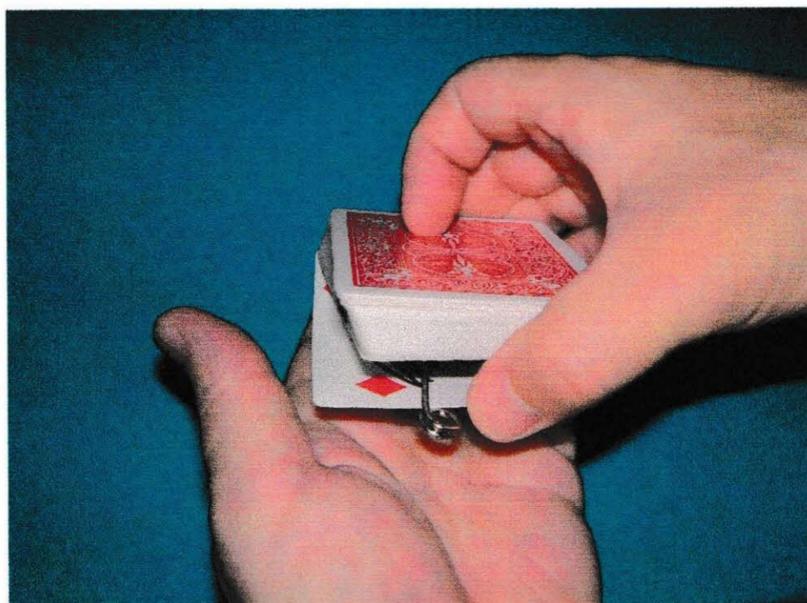


図89

- ④手前に飛び出たギミック・ピンのバネ支点のすぐ上の部分を右親指で押さえてデッキを持ちます。「われわれも、お客さんのカードがわからなくなって失敗することが、ときどきあります。しかし、そういうときのために、いつも安全管理をしてあるのです。安全管理といっても、大げさなものではなくて、ただの安全ピンです。いつも上着の中につけてあります。ごらんください」そう言って、この状態で、左手で上着を左側に開けながら、デッキを持った右手で、上着の内側を指差すような動きの感じで、デッキ全体をほんの一瞬内側にくっつけるようにすると、ボトムの客のカードとギミック・ピンだけが磁石に吸いつけられて上着の内側にギミック・ピンと一緒にくっつきます。あたかも、客のカードが安全ピンで固定されているように見えます(図90)。このときのタイミングは、実際に練習してみないとわかりませんが、ほんの一瞬でくっつきますから、ほとんど、デッキと上着とがじっと固定しているような印象はありません。このカードは、フォースではありませんし、サインもそのままですから、この状態で、サインした観客に、サインとカードを確認してもらっ

てもかまいません。



図90

- ⑤デッキをテーブルの上に置くか、上着のポケットに入れます。空いた両手で安全ピンをはずすフリをします。ギミック・ピンはピンがカットされて何もない部分を指で押さえて、ポケットにしまえます。カードとサインを、演者が手に持ったまま、改めて観客に示して終わります。実際、カードには穴が開いてないのですが、ほとんどの観客は気づきません。もし、どうしても、そのカードをサインした観客に確かめさせたいのであれば、「このままでは、このカードは使えませんので、マジックで穴は塞ぎます」とでも言うておくのかもしれませんが、私自身は、そういう演出はとっていません。

3. 追加の注意書き

実は、上の手順で最もむずかしいのは、第1の方法では、最後に、上着の内側で、安全ピンを客のカードに刺す箇所であり、第2の方法では、左手のギミック・ピンを右手のデッキのボトム・カードの上に滑り込ませる箇所です。自分でやってみるとすぐにわかります。特に後者は、ピンの頭のところを左手の親指と中指とで挟んで手前を持ち上げるようにするとうまくいきます。また、上の方法は、いずれも解説の都合で、ただちに当てるようになっていますが、実際は、やはり、リチャード・オスター lind のように、3人の客に3枚のカードを選ばせて、その3番目ぐらいの当て方に使うほうが適当かもしれません。私は、**Part3-No.1** で解説したホーミング・カードのクライマックスとして、金属カップから出す代わりに使っても面白いかな、と思っています。(M. M.)

masquerade の予約購読制度導入について

masquerade 本誌を、定期購読ではなくて、「予約購読制」にいたします。事前にお金を受け取ることなく、購読を予約された方々に限定100部のうちの番号をあらかじめ確保し、発行のたびごとに注文がなくてもお送りする方式です。購入は自由です。

そこで、**masquerade** 本誌の「予約購読」を希望される方は、Eメールもしくは、はがきでお申し込みください。折り返し、「あなたの予約番号は、限定100部のうちの00/100番です」と書いた紙をお送りいたします。発行のたびごとに、この番号の **masquerade** 本誌を自動的に送付いたします。支払いは、雑誌が届いてからですし、購入の義務はありません。購入しない場合は、その旨お知らせ願えればけっこうです。ただし、その時点で、番号は、別の方に引き継がれます。

ユリ・ゲラーのメンタル・マジック

麦谷真里

1. まえがき

ちょっと別の原稿を書く用事があった、1年ぐらい前にユリ・ゲラーのことを集中的に調べたことがあります。もちろん、1974年の来日時の大騒ぎは、実体験として承知しています。ランディの本を始めとするさまざまな文献を読むと、ユリ・ゲラーが超能力者などではなく、メンタル・マジシャンであることは、ほぼ明らかである、と私は思っています。したがって、超能力者としては、世の中から、まったく消えたものと思っていたのですが、なかなかどうして、ホーム・ページやCD、映画まであって、いまだに大活躍なのです。驚くと同時に、こんなに長い間(30年!!)、「超能力」を売り物にして食っていけること自体がむしろ超能力なのではないかと思ったほどです。

そのユリ・ゲラーが、1974年3月に、日本のテレビで演じたメンタル・マジックがあります。私の記憶に間違いがなければ、丸いフィルム缶を使ったと思いますが、あるいは、葉タバコなどの別の缶だったかもしれません。現象は単純で、7つの丸いフィルム缶のひとつに、ゲストが鍵を隠します。ユリ・ゲラーは、缶に触れないで、どの缶に鍵が入っているか超能力で当てるといいます。

実は、テレビで観ているとき、あんまり驚きませんでした。それは、超能力のデモンストレーションというよりも、まるで手品臭かったからです。手品なら、いろんな解決方法があると思ったからです。缶に何か仕掛をしておいて、一度開けられた缶がわかるようにしておけば、簡単です。ユリ・ゲラーの缶は、ビニール・テープで円形に封がしてありましたから、そこに着目した奇術家がいまいました。私のおぼろげな記憶からすると、坂本種芳さんか、柳沢義胤さんだったと思います。それは、ビニール・テープをいっぱい伸展させて封をしておけば、一度缶を開けると、ビニールが同じように伸展なくて、二度と同じ状態では封ができないから、その缶だけがわかる、という説明でした。

私は、そんなものかな?とだけ思っただけで、自分で演ってみようなどとは思いませんでした。ビニール・テープの話も、もっとほかにうまい方法がありそうな気がして、深く考えませんでした。

こうした記憶は、脳細胞の襲いの間にじっと埋め込まれていて、ひょんなときにフラッシュのように甦るものです。

それは、USJの土産物売り場で起こりました。手ごろな、丸いフィルム缶を売っていたのです。もちろん、それはフィルム缶などではなく、神戸風月堂のゴルフの入った土産物の缶です。ただ、なにしろUSJですから、擬似フィルム缶なのです。私は、瘴癘の地で熱病に冒された旅行者のように、7個抱えてふらふらとキャッシャーに運びました。本当のフィルム缶よりはずっと小さくて、ユリ・ゲラーの使ったものよりは、たぶん小振りです。それがかえて、クローズ・アップには向いています。3種類の絵柄があって、私が買い求めたのは、黒が基調のジュラシック・パークの恐竜の絵柄のものです(図91)。1個の大きさは、直径が8.5センチ、高さが4センチで、これに、前述のゴルフが入っています。私は、神戸風月堂の職人さんには申し訳ありませんが、中のゴルフは要らないので、持ち運びの重量を軽くするために、7個分のゴルフはすべてハイアット・リージェンシーの部屋の屑籠に置いてきました。

すでに、いろんなところに書きましたが、用具が手に入るようになるということが、手品を練習する大きな動機になります。この7個のジュラシック・パークの缶を見たとき、記憶の奥からユリゲラーのデモンストレーションが甦ったのです。



図91

2. プレゼンテーション

[必要なもの]

- ①小さなフィルム缶 7個 (図91)。この缶の入手方法はすでに説明しましたが、これが、大阪のUSJへ行かないと手に入らないのか、あるいは、どこかUSJ外のショップでも売っているのか、その辺のところはわかりません。ただし、当然ですが、同種のものがあれば、もちろん、それで代用されてもかまいません。
- ②鍵 1個
- ③ビニール・テープ 1巻。これは絶縁にも使う普通のビニール・テープです。私の用いているジュラシック・パークのフィルム缶は黒地に赤い絵柄のものですから、私は赤色のテープを使っています。しかし、何色でもかまいません。ただし、後述するようにあまり暗いものでは、一度剥がした跡の重なり部分の区別が、すぐにつかなくて適当ではありません。
- ④スコッチ・テープ 少し(鍵を缶の中に固定するためのものです)

[準備]

7個の空のフィルム缶の蓋を閉めて、蓋と胴体との境の部分にビニール・テープで封をします(図92)。このとき、できるだけビニール・テープを張って封をします。これは、ことさらテープを強く引っ張る必要はなく、丸い缶の一箇所に端をくっつけて、そのまま、皺が生じないように軽く引っ張りながら巻きつけていけばよい程度です。

同時に、テープを最初に缶にくっつける場所を一定にしておきます。私の缶は、胴体の金属に繋ぎ目の部分がありますので、そこを起点としてテープを巻きつけています。一巡して元の位置に戻ったら、3cmぐらい重ねたところでテープを切って封をします。このようなものを7個作ります。

このとき、7個の缶の蓋や胴体の絵柄の位置を一定にしてビニール・テープで封をしておけば、一度、観客の開けた缶は、それらの位置が元通りになっていなくて、容易に同定できるだろうと思

われるかもしれませんが、そんなふうにしてあまりにも整然と封をすると観客にもわかってしまいます。それに、偶然にせよ意識的にせよ、万が一、まったく元通りに蓋をされたら、それらの情報は、かえって演者を混乱に陥れるだけですので、ここは、むしろ、蓋と胴体の位置関係などはバラバラにして封をしておきます。

[秘密]

ビニール・テープで封をした最後の重なり部分を約3cmとっておく(図92左の缶)と、観客が一度空けた缶は、元通りに封をしても、重なり部分が1cmぐらいにしかありません(図92の右の缶)。これは、最初に封をしたときのビニールの伸展による影響です。一旦、開けてから再び封をするときは、この伸展が保たれず、どうしても短くなってしまいます。しかも、この2つの状態のちがいは一目瞭然です(図92)。



図92

[やり方]

①準備した7個の缶をテーブルの上に無造作に並べます。この「無造作に」というところが重要です。客に、「これらの缶は、いまのところすべて空っぽです。重さも大きさもすべて同じ缶です」と言って、任意の缶に触ったり振ったりして調べてもらいます。客が、十分に調べたら、鍵を取り出します。「この鍵を、私がみなさんに背中を向けている間に、この缶のうちのひとつに入れて、中で動かないようにスコッチ・テープで固定して、蓋を元通りに閉め、赤い封印も元通りにしておいてください」と言います。そして、客にそのようにしてもらいますが、缶から剥がしたビニール・テープがあちこちにくっつかないように、たとえば、テーブルの端などに片方の端をくっつけておくといい、などということを助言しておきます。ビニール・テープは、缶から剥がしても、スコッチ・テープのようにすぐにくっつきあったり、絡まったりしないので、あまり心配はないのですが、中には、無神経な人がいて、剥がすそばからくしゃくしゃに丸めてしまわないとも限りません。もっとも、そんなときのために、ポケットにでも、赤いビニール・テープの一卷と鋏を用意しておくといでしょう。ただし、そのときは、そのために新しく封印した缶を入れて、もう一度選んでもらうという作業が必要になります。

②観客が、「入れ終わった」と言ったら、缶を混ぜてくれるように言います。これは、観客自身にも

鍵の入っている缶をわからなくするためです。以上のことがすべて終わったら、前を向きます。ここで、念ために、客に、もう一度、テーブルの上の缶を混ぜてくれるように頼みます。そして、客のこの作業の間に、缶を眺めて、明らかにビニール・テープの重なり部分が3cmより短くなっている缶を探します。あったら、それが客の缶です。しかし、缶は円形ですから、ビニール・テープの重なり部分が、演者の視線の反対側になっている缶がある場合もあります。そのときは、客に向かい、「私が、1個ずつ触ると、鍵の分のわずかな重さの違いでわかってしまうかもしれませんから、あなたが、1個ずつ掌に載せて、私の代わりに重さを量ってみてくれませんか？」と言います。客の掌に1個ずつ載せれば、その動きの中で、必ず、テープの重なり部分を見るチャンスがあります。客に、「どうです？重さのちがいがわかりますか？」とでも言っておきます。

- ③客の缶が判明してもすぐには当てないで、少しずつ数を減らしていったり、客にマジシャンズ・チョイスさせたりして、演出します。最後の1個が決まったら、客にビニール・テープをとって缶を開けさせます。もちろん、中には鍵があります。

3. コメント

ユリ・ゲラーは、どうもスプーン曲げのほうが有名で、そちらにばかり話題が行ってしまいがちですが、こういう「手品」もけっこう演っていたのです。(M. M.)



masquerade CLASSIC EDITION No.3 "The Wallet"

クラシック・エディション・シリーズのNo. 3「ザ・ワレット」が刊行になりました。現在、市場に出回っているおびただしい数のワレットを整理して8種類に分け、そのうちの6種類について、沿革と基本的な構造、さらに使い方を詳述したものです。

A4版、30ページ、カラー印刷。

1部 3000円(〒240円)

ご注文・連絡は、郵便かメールでお願いします。(2002年10月)

雑誌が先に届きます。支払いは後です。同封の郵便振替か指定の銀行振込です。

郵便の送付先: 〒142-0064 東京都品川区旗の台3-15-1-208 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com



edited by dr. masato mugitani
published by masquerade cooperation
part III no.8, november 2002

21枚カード・トリック

麦谷眞里

(まえがき)みなさんが、初めて手品に興味をもってから、最初に人に見せた手品はなんでしょう？私の場合は、「ユーモア・ウサギ」であり、「玉子になるハンカチーフ」でした。いずれも、渋谷にあった天地奇術研究所の商品です。そのころ、天地創一氏は、渋谷の東横百貨店内に店を出していて、私は、自分の誕生日に、そこで手品用品を買ってもらったのです。練習して大人たちに見せると、みんなが感心するので、演じている自分のほうが驚いた覚えがあります。そのあとは、たぶん、プラスチック製の3色のカップを使う「カップと玉」だったような気がします。あるいは、夜店で買った粗末なシェル・ゲームだったかもしれません。意外にも、トランプ手品を覚えたのは、さらにそのあとでした。デッキのボトム・カードを覚えておいて、それをキー・カードにして客のカードを当てるトランプ手品が最初だったような気がします。デッキの表を見ながらキー・カードに隣り合った客のカードを探す「あれ」です。思えば、のどかな手品でした。

そして、そのころ同時に覚えて、よく人に演って見せていたのが、「21枚カード・トリック」です。このタイトルが正しいのかどうかはわかりませんが、欧米の本にも、「21 CARD TRICK」などと書いてありますので、たぶん、そう呼んでいいのだと思います。**masquerade** の読者で知らないひと

はいないと思われませんが、念のために簡単に原理を説明しますと、次のようなものです。

1. 21枚カード・トリックの原理

デッキの中から任意の21枚を抜き出し、表向きで、1枚ずつ左から右へ横に3列に配って行って、最終的に7枚ずつの3列に並べます(図93)。この21枚の中から観客に1枚だけを心の中で思ってもらいます。引いてもらうのではなく、心の中で思ってもらおうところがミソです。

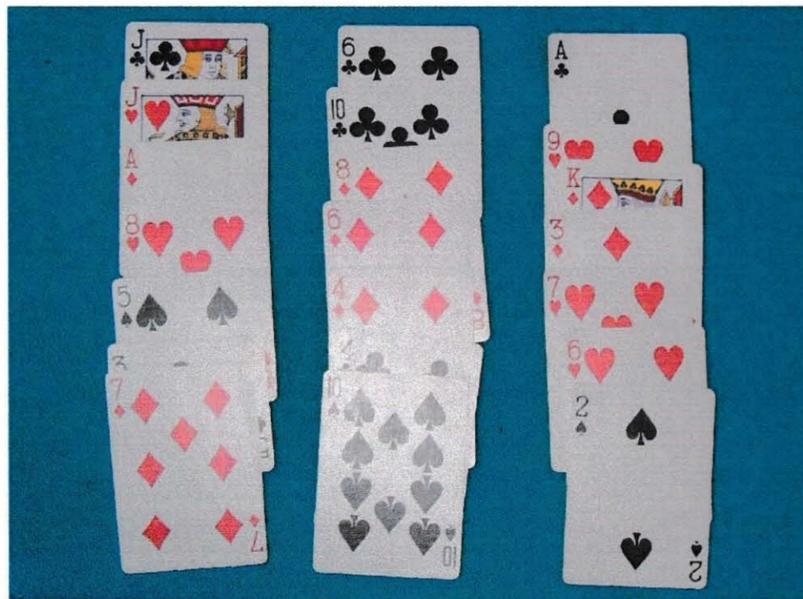


図93

客が「思った」と言ったら、ここで、客のカードがどの列にあるかを訊ねます。客は、列ぐらいいは教えてもいいだろう、という軽い気持ちになります。3つの列をそれぞれ集め、客の指摘した列が中央に来るようにして3つの列のポケットを重ねます。このまま表向きで、さきほどと同じように、左から右へ横に1枚ずつ3列に配って行きます。実は、この操作によって、客の指摘した列の7枚は、新たな3列の左から順に、左列2枚、中央列3枚、右列2枚とに分散されることになるのです。

ここで、再び客に、自分のカードがどの列にあるかを訊ねます。各列を再び集め、客の指摘した列が中央になるように3つのポケットを重ねます。

- ①仮に、客のカードが左の列にあったとすると、当該の2枚は、表向きの21枚の10枚目と11枚目に来ていますから、この状態で、三たび、左から右へ1枚ずつ配って列を3つ作ると、この2枚は、左の列と中央の列の真ん中(7枚の中央)に分散されます。
- ②仮に、客のカードが中央の列にあったとすると、当該の3枚は、表向きの21枚の上から10枚目、11枚目、12枚目に来ていますから、さらに3列に配ることによって、この3枚は、各列の真ん中の位置に分散されます。
- ③仮に、客のカードが右の列にあったとすると、当該の2枚は、表向きの21枚の上から、11枚目と12枚目に来ていますから、さらに3列に配れば、この2枚は、中央の列と、右の列の真ん中の位置に分散されます。

以上のことから、三回目に3列に配ったあとで、客に、自分の「思ったカード」がどの列にあるか、と問えば、この時点で客の心に思ったカードが判明するのです。あとの当て方は自由です。客にしてみれば、自分が心の中で思ったカードが、いつのまにか当たってしまったような強烈な印象です。

それは、どの列にあるかなどと答えたくらいで、心に思ったカードが当たってしまうことに対する驚きです。しかし実際は、上の説明のように、きわめて論理的に当たってしまいます。

これは、初心者が覚えるトランプ手品としては秀逸です。ところが、その後、ダブル・リフトやビドル・ムーブなどを覚えるにいたって、ほとんどこの種のトランプ手品は演らなくなります。そのうち、パスとサイド・スティーリングができるようになって、自在に客のカードをコントロールできるようになれば、なおさらです。

ところが、意外にも、この手品は、欧米では研究しているひが多いのです。およそ、バリエーションなどないと思われるかもしれませんが、たとえば、表向きで配って客に列を問う回数をたった1回だけにしたらどうでしょうか？不思議ではありませんか？今回は、それをとりあげてみました。

2. "THE CARDICIAN"

「21枚カード・トリック」の最も熱心な研究家は、意外なことに、エドワード・マーローなのです。名著「カーディシャン」(1953年)にも、「最新の21枚カード・トリック」と題して、マーローの方法が解説されています。まず、それを紹介してみます。ただし、ハンドリングは、やや変えてあります。

- ①マーローは、21枚のカードを表向きでテーブルの上に並べたりはしません。裏向きのまま、7枚ずつのパイル(山)を3つ、テーブルの上に作ります。もちろん、こうする前に、客にデッキ全体をシャッフルさせてもかまいません。
- ②客に、テーブル上の3つのパイルのうちのひとつを選ばせます。そして、そのパイルを裏向きのまま一度シャッフルしてから、カードの表を客だけに見えるように扇形に広げて、中の1枚を心の中で思ってくれるように頼みます。このとき、客の目の動きを見て、客が、大体、何枚目を見て覚えたかを推測しておきます。ここでは仮に、客が、上から3枚目のカードを見つめて覚えたと仮定します。これは、当然ですが当たらないこともあるわけですから、ここでは、それほど気にする必要はありません。
- ③客に、手に持っているパイルをテーブルの上に残っている2つのパイルでサンドイッチのように挟んで重ねてくれるように指示します。これで、21枚のカードは再びひとつのポケットになりました。演者は、この21枚を受け取って、次のようにシャッフルします。ポケットを右手に裏向きでオーバーハンド・シャッフルをする形に持ちます。まず、左手に、裏向きで7枚のカードをランし、その7枚の上に、右手に残っている14枚のポケットを載せます。これで、さきほど客の持っていた7枚のパイルが21枚のトップに来ました。
- ④再び21枚を右手にオーバーハンド・シャッフルの形に持ちます。ここで、さきほど予想した客のカードの位置を考えます。上から3枚目でした。そこで、右手から3枚のカードを左手にランします。ただちに、この3枚を右手のポケットの上に戻します。これで、想定された客のカードは21枚のトップに来たことになります。ここで、ダブルカットを用いて、このトップカードを21枚のボトムに回します。したがって、客の覚えた可能性のあるカードは、トップの6枚か、ボトムの1枚に限定されていることになります。
- ⑤21枚のポケットを裏向きのまま左手でディーリング・ポジションに持ちます。ここで、初めて、カ

ードを表向きでテーブル上に配ります。上から1枚ずつ、表向きに3列に配って行きますが、最後の1枚(ボトムカード)は、そのまま裏向きで右手に持っています。この右手のカードで、テーブル上の20枚の表向きのカードを指し示して、「あなたのカードが、3つの列のうちどの列にあるかよく見てください」と言います。客が、「どの列にもない」と言ったら、奇跡が起こりました。心の中で快哉を叫びます。「そうですね。あなたのカードは私が持っているのですから」と言って、右手に持っている裏向きのカードをゆっくりと表向きにして示します。

- ⑥もし、客が、3つの列のひとつを指差しても、がっかりすることはありません。客の目の位置を読む演者の推測が当たってなかっただけのことです。早速、次の行動に移らねばなりません。客のカードは、客が指示した列の最初に配った2枚のうちのいずれかです。この2枚をひそかに覚えてしまいます。
- ⑦右手に持っているカードを表向きにして、これを右側の列に加え、再び21枚をひとつにしますが、客の指摘した列を中央にして集めます。したがって、可能性のある2枚は、トップから8枚目と9枚目に来ています。パケットを右手にオーバーハンド・シャッフルをする形に裏向きで持って、左手に8枚ランし、右手の残りのパイルを左手の8枚の上に載せます。すると、客の選んだ可能性のあるカードが21枚パケットのトップとボトムに来ます。演者は、トップとボトムのカードがそれぞれ何であるかを知っています。
- ⑧裏向きのままパケットを客に手渡します。客に、さきほど心の中で思ったカードを言ってもらいます。それが、ボトムカードだったら、パケット全体をひっくり返して表向きになったカードを見るように言います。トップカードだったら、そのまま一番上のカードをひっくり返すように言います。

3. "MARLO WITHOUT TEARS"

1983年に出た、317ページ30ドルのこの本(図94)には、8ページにわたり全部で8種類の「21枚カード・トリック」が解説されています。

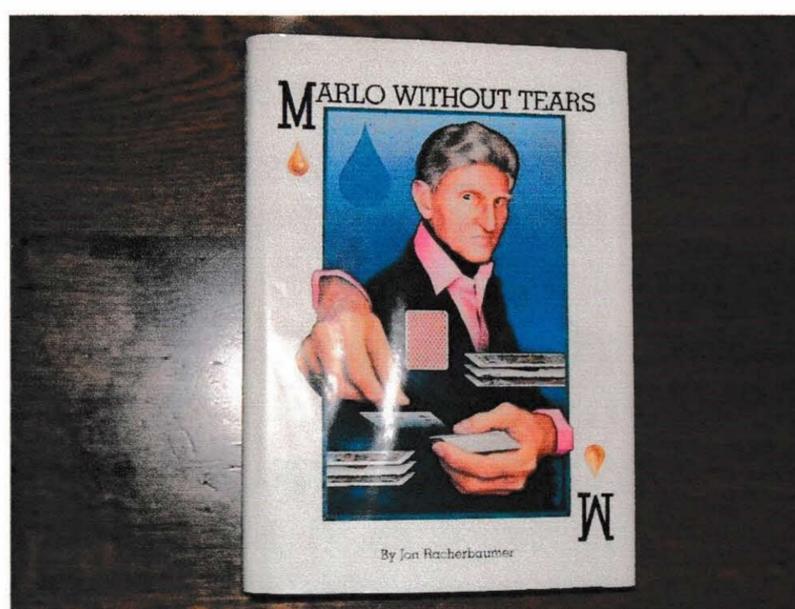


図94

“without tears”というのは、直訳すれば文字通り「涙なし」ですが、転じて「容易に学べるように工夫した」というほどの意味です。昔、私(麦谷)が大学でドイツ語をやっていたときに、「涙なしの

ドイツ語」(白水社)という本がありました。上の本は、さしずめ、そのマーロー版です。もっとも、いきなり、サイド・スティーリングで始まりますから、読者によっては、どこが「涙なし」なのか、疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。

ただ、相対的には、やはり工夫されています。著者のジョン・ラッカーボーマーによれば、マーローの本を開くときは、いつも少し不安と恐れを感じるということです。それは、説明の分量、密度の濃い細かな記述、夥しい数の既刊・未刊の資料の存在、そしていろいろな他の著作からの引用など、簡単に読み進むことのできない障害が想定されるからです。実際、エドワード・マーローの著作は、3500ページに及び、本は56冊以上にのぼります。関連の雑誌まですべて揃えたとしても、読み進むのは容易ではありません。

その観点からすれば、この本は、そういうことはありません。ほとんど、この本1冊で、ほかの文献を参照する必要もありませんし、どこか別のところに解説してある技法を使わねばならない、ということもありません。その限りにおいては、なるほど「涙なし」なのです。

さて、この8種類については、それぞれに味があります。一番目のものは”THE CARDICIAN”に解説してあるものとほぼ同じですが、ハンドリングが変えてあります。それぞれに、表向きでテーブルに配る場面が少なくとも一回はあります。そこで、ここでは、この8種類の作品から派生した、一度も表向きで配らない手順を紹介してみます。これは、2001年に書かれたジョン・ラッカーボーマーの「グリフティ・ビジネス」という原稿に収載されているもので、まだ出版物にはなっていません。この作品は、むしろ、「21枚カード・トリック」を知っている人をひっかけするためのものです。

[上級者向き21枚カード・トリック]

- ①7枚ずつのポケットを3つ客に作らせて、よく切ってもらいます。3つのポケットをそれぞれテーブルの上に置いて、客にそのうちのひとつを選んで左手に持ってもらいます。「お好きなところでカットして、カットしたところの一番下になっているカードをこっそり見て覚えてください」と言います。客は、おそらく右手でカットして、カットしたポケットのボトムカードを見て覚えます。客が間違えないように、デッキの残っているカードで演者がやってみせるとよいでしょう。
- ②覚えたら、カットしたままの右手のカードをテーブル上の2つのポケットのどちらかの上に置いてもらいます。客の左手にもまだ何枚かのカードが残っています。この客の左手に残っているカードを、いま、客が右手のカットしたカードを置かなかった、テーブル上の残りのポケットの上に載せます。そして、このポケット全体をもうひとつのポケットの上に載せます。
- ③混乱を避けるために、いまの記述をわかりやすく繰り返します。最初にテーブル上に出された7枚ずつの3つのポケットをA, B, Cとします。客の選んだポケットをAとすると、客はAの一部を持ち上げて、ボトムカードを覚え、この持ち上げたポケットをテーブル上のBに載せます。客の手に残っているAの残りは、Cの上に載せ、そのあとC全体をB全体の上に載せます。
- ④結果として、客の覚えたカードは、21枚のポケットの上から14枚目に来ます。ポケットをフォールス・カットしてから、左手に裏向きで持ちます。「これからカードをテーブルの上に置いて行きますから、あなたの覚えたカードがどの列にあるかをよく見ていてください」と言いながら、裏向きのままで、1枚ずつ、左から右へ横に3列に配って行きます。13枚配ったところで、一旦手を

止め、14枚目(客の覚えたカード)を右手に裏向きで持ったまま、このカードで、配った13枚を示して、「どの列に自分のカードがあるか、よく見ておいてくださいね」と言います。そして、この動作の間に、右手のカードをグリップスして表を見てしまいます(図95)。これで客のカードが何であるかがわかりました。客は、カードが裏向きで配られているので困惑します。しかし、それを無視して、この14枚目も裏向きで中央の列に置き、残りを最後まで裏向きで配り続けます。



図95

- ⑤「どの列にありましたか?」と訊きますが、客は答えられません。そこで、急に気が付いたかのように、「あ、すいませんでした。これは表向きで配らなければいけない手品でした!」と言います。特に、「21枚カード・トリック」を知っている人は苦笑します。「でも、まあ、表でも裏でもあまり関係ないのです」こう言いながら、テーブル上に配られたカードを両手でぐしゃぐしゃに集めてしまいます。「覚えたカードを心の中で思ってください」客の顔を見ながら、あたかも心を読むようにして、さきほどグリップスしたカードの名前を言います。
- ⑥カードの位置がわかっていますので、当てる演出はいかようにもできます。ご研究ください。
(コメント)つまらなく思える手品も、ちょっとした工夫で、知っているマニアでさえひっかかる作品になるという好例です。マーローは、比較的このようなアプローチが得意で、他人のアイデアを拡大・敷衍させて、みごとな作品にしてしまうことが上手です。”MARLO WITHOUT TEARS”は、決してやさしい本ではありませんが、マーローの入門書としてはお勧めです。(M.M.)

masquerade の予約購読制度導入について

masquerade 本誌を、定期購読ではなくて、「予約購読制」にしております。事前にお金を受け取ることなく、購読を予約された方々に限定100部のうちの番号をあらかじめ確保し、発行のたびごとに注文がなくてもお送りする方式です。購入は自由です。

そこで、**masquerade** 本誌の「予約購読」を希望される方は、Eメールもしくは、はがきでお申し込みください。折り返し、「あなたの予約番号は、限定100部のうちの00/100番です」と書いた紙をお送りいたします。発行のたびごとに、この番号の **masquerade** 本誌を自動的に送付いたします。支払いは、雑誌が届いてからですし、購入の義務はありません。購入しない場合は、その旨お知らせ願えればけっこうです。ただし、その時点で、番号は、別の方に引き継がれます。

「金庫」のひとつの使い方

麦谷眞里

(はじめに)手品をやっているひとは、多かれ少なかれパズルにも興味のあるものです。実際にパズルと手品を組み合わせたような商品も市販されています。たとえば、先日、松尾さん(マリック)がテレビで演じていたモナリザのジグソー・パズルのものは、その名もズバリの”The Puzzle”という売価295ドル(約36000円)のアルファ・マジックの商品です。あの手品は、もう少し、改良できると思うのですが、それは今回の題材ではありません。「金庫」という名で市販されているパズルとも手品ともつかない商品があります。今回は、それらを扱います。

1. 「金庫」の種類

図96に、いくつかの「金庫」を示しました。「金庫」というのは、商品名に Vault とついているからそう呼んでいるのであって、もとより金庫機能はありません。ちなみに、Vault というのは、銀行の地下にあるような大金庫のようなものを指します。それに対して、ホテルの部屋に備え付けてあるものや、家庭で使う手提げ金庫のような小振りのものは、safe です。

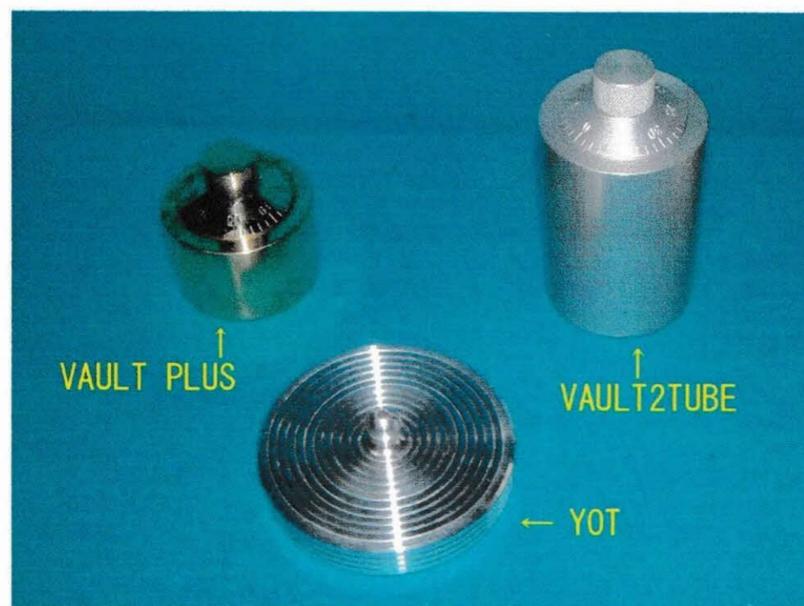


図96

なぜ「金庫」という商品名がついているかということ、図96でわかる通り、蓋があたかも金庫のコンビネーション・ダイヤルのようにになっているからです。この蓋は、観客が開けようとしても容易に開きません。かといって、本物の金庫のようにダイヤルのコンビネーションで開くのでもありません。そういう意味では、パズルと言ってもいいかもしれません。図96で金庫のようなダイヤルのついていない中央下の YOT という商品は、まさにパズルとして売られています。これは、底のほうに1ドル貨幣が入れてあって、それを取り出すという趣向のパズルです。

「金庫」の形態を呈していない YOT も一緒に掲げたのは、これらの用具は、いずれも蓋の開け方が共通しているからです。観客に手渡して開けてみるように言うと、蓋は回転するし、少し上下左右に「遊び」があるので、簡単に開くように思えますが、これは決して開きません。無論、力任せに引っ張って開けようとしても無理です。

秘密は、胴体に内蔵されている金属性のピン(図97)にあります。これらのピンは、胴体の中から水平方向に前後に動くように作られていて、蓋の側面に刻まれている溝に食い込むことによって蓋が開かないように固定されています。言い換えれば、蓋を開けるためには、これらのピンをすべて胴体の壁側に収納した状態にしないといけません。図97の VAULT2TUBE の場合、そのピンの数は円周上に6本ありますから、どのような方向に傾けても、反対側のピンが食い込むことによって容易に蓋は開きません。開けるためには、Vault 全体を回転させて、遠心力によって、すべてのピンを壁側に収納させることが必要です。このコツは、何回か試みてみれば、比較的容易にマスターすることができますので、構造の原理さえわかれば、開けるのは造作もないことです。ほかの2つの VAULT や YOT も基本的な原理は同じです。



図97

実を言うと真鍮性の VAULT PLUS のほうは、PLUS というだけあって、これにもうひと捻り仕掛けが加わっていて、これだけでは開きません。さらに特別な操作が必要になります。しかし、PLUS が売り出される前のバージョンのものは、遠心力だけで開けることが可能です。

これをどんなふう到手品に使うか、ですが、次のような現象が可能です。

空の「金庫」に1万円札を入れて蓋をします。これで、金庫は開かなくなりました。確かに開かないことを複数の観客に試してもらいます。金庫の扉(蓋)を開けるには、コンビネーションが必要です、と言って演者は5種類のコンビネーションが書いてある5枚のカードを示します。観客の中から4人のひとに出てもらい、それぞれにコンビネーションの書いてあるカードを選んでもらいます。残りの1枚は演者が取ります。ここで、もし観客が希望するのなら、演者の持っているカードといつでも交換できることを言います。

観客が自分の選んだコンビネーションのカードに満足したら、それぞれの番号を試してもらいます。もちろん、誰ひとりとして開けることはできません。最後に、残ったコンビネーションに従って演者が試すと、金庫は見事に開いて、中の1万円札は演者の手に渡ります。

タネは、言うまでもありませんが、演者は自分が試す前に、ちょっと金庫を回転させて遠心力で中のピンを引っ込めればいいのです。パソコンを使って、5種類のコンビネーションのカードをカラフルに作り、それらをラミネート加工して、真鍮製の「金庫」と一緒に使えば、手品の道具立てとし

では申し分ありません。

ただ、なにしろ金属の塊から作っていますから、価格が安くありません。純粹パズルの YOT が 35ドル(約4300円)、アルミ製の VAULT2TUBE が95ドル(約11000円)、真鍮性の VAULT (見た目は図96の左側のものと同じ)が110ドル(約13000円)、そして、図96の左側に見える、やはり真鍮性で、さらにひと捻りしてある VAULT PLUS が195ドル(約23000円)です。したがって、ただのパズルとして楽しむのでは、ちょっと高いような気がします。

なお、アルミ製と真鍮製がそれぞれ95ドルと110ドルですから、そんなに値段が変わらないのなら、真鍮製のほうがいのように思われるかもしれませんが、このアルミ製は、商品の名前の途中に「2TUBE」と入っているように、ビル・チューブにもなっているのです。しかも、胴体が大きいことから、かなり大きなものも入れることができます。たとえば、婦人物の腕時計でも入れることが可能ですから、演技のバリエーションが広がります。それぞれ一長一短あるのです。

2. 別の使い方

今回、実は、この「金庫」で別の使い方をするのが目的でした。それは、予言を書いた紙を入れておくことです。予言する手品は山のようにありますから、その予言を書いた紙を小さく折り畳んで、これらの「金庫」の中に入れておくのです。YOT もあまり収納力はありませんが、紙ぐらいいは入ります。演技の最初に、この「金庫」をテーブルの上か観客の目立つところに置いておきます。そして、その時が来たら、「これは、ずっとここにあって、誰も触っていませんよね？もともと、たとえ誰かが触ったとしても、これは簡単には開かないんですよ」と言って客に示します。そして、何人かの客が試したあとで、演者がいとも簡単に開けてみせて、中から予言の紙を取り出します。

なんだそんなもの、封筒に入れておいても同じじゃないか、と言われればその通りです。しかし、いろんな手品を次々と演じているときに、1枚の封筒を、ずっと観客の目の触れるところに置いておくのは、けっこう気を使います。その点、「金庫」は、そもそも重いですし、誤ってテーブルから落ちてもすぐにわかります。それに、なによりも、予言がずっとガードされていた、という印象を観客に与えることができます。しかも、予言を取り出すという動作が、ひとつのアクセントになっていますから、予言をすり替えたと思われることはありません。

では、いったい、具体的にはどんな手品で、それを使うのか、ということですが、私自身は、ラリー・ベッカーの「サム・トータル・ステージ」で使っています。この手品には、いろんなバリエーションがあって、クローズ・アップのバージョンもあるし、ラジオで行なうバージョンもあります。しかしながら、「金庫」をもっとも有効に使えるのは、このステージ・バージョンです。後述のように大きな利点があるからです。私は、ステージではなくて小人数のパーティーなどでも好んで演じています。

3. サム・トータル・ステージ

[現象] 演者は、観客の数人から、適当に任意の数字を順に言ってもらって6桁の数字をホワイトボードに書きます。次に、演技の前からずっとテーブル上に置いてあった「金庫」の中から、紙を1枚取り出して広げます。そこには、5桁の数字が4つ書いてありますが、観客のひとりに、それらの

数字をホワイト・ボードの上で足し算してもらいます。足し算の結果は、さきほど、観客たちが任意に言って構成した6桁の数字とぴったり一致しています。

[必要なものと準備]

- ①ホワイト・ボードとマーカー。
- ②「金庫」1個 どれでもいいです。
- ③数字を書いた紙。実は、これに秘密があります。詳しく書きます。紙は、掌にちょうど入るような小さなものにします。私が使っているものは7.5センチ×7.5センチの正方形のメモ用紙です。これに、5桁の数字を4つ書きますが、この4つを上から順に、A, B, C, Dとすると、Cは、ダミーで、どんな数字でもかまいません。重要なのは、A, B, Dの3つで、この3つの数字を足した合計が111, 111になるようにセットします。すなわち、 $A+B+D=111, 111$ です。例をひとつ掲げておきます(図98)。上から3番目の23, 795は、ダミーです。残りの3つの数字の合計は、111, 111になっています。合計が111, 111であれば、数字はそれぞれなんでもかまいません。この紙を4つ程度に小さく折り畳んで「金庫」の中に入れて、ステージ上の、観客席からよく見えるところに置いておきます。

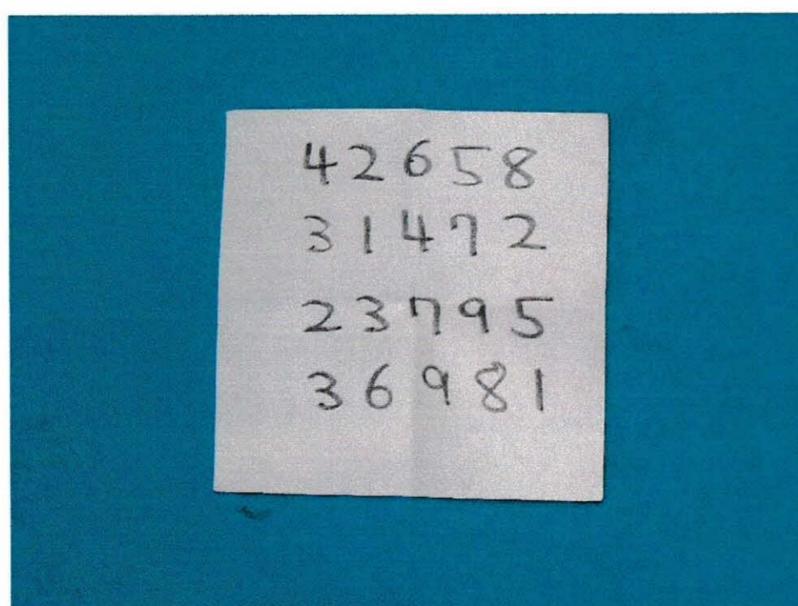


図98

[やり方]

- ①まず、観客に「金庫」を示します。「これは、さきほどからずっとそこに置いてあったものです。中には紙が一枚入っていますが、ダイヤルの番号を知っていなければ誰にも開けることはできません」と言います。複数の客に試させますが、もちろん開きません。「これは、あとで開けますので、その前に、100万通りもある数字の中から任意の数字をひとつ、このホワイト・ボードに書いておきます」こう言いながら、ホワイト・ボード用のマーカーを取り上げて、ボードの左上のほうに「1」と書きます。このとき、「100万通りの中からひとつを選ぶのです」と強調しながら書きます。ホワイト・ボードはできればイーゼル(画架)のようなものに立てかけて客のほうを向くようにしておきます。
- ②「それでは、次にどなたか、1以上の数でお好きな数をおっしゃってください。もちろん9以下ですよ」と言って、特に声が上がらなければ、適当な客を指差します。ここで大事なことは、「1以上」

ということです。「1以上」と言えば、正確には1も含まれますが、聞いている客が1を選ぶことはまずありません。実は、ここだけは、1を選ばれてはあとでちょっと困るからです。客が数字を言ったら、その数を、さきほどホワイト・ボードに書いた「1」のすぐ右隣に書きます。ここでは仮に客が「7」を選んだとしておきます。最終的には6桁の数字を書きますので、それを見越して数字の間隔に注意しておきます。

- ③別の客に、同じように1から9までの間の数字をひとつ言ってもらいます。ここは、もう「1」を選ばれてもかまいません。しかし、ゼロは避けます。そのために、「1から9までの間のお好きな数」と言っておきます。客が数字を言ったら、それをさらにホワイト・ボードの「17」の右隣に書きます。ここでは、仮に「5」としておきます。
- ④これで、ホワイト・ボードの上端に「175」の3つの数字が並びました。ここで、位取りのための「,」を「5」の右下に、つけておきます。「175,」となります。こう書くことによって、あと3つの数字を選ぶことが観客にもわかります。
- ⑤したがって、あと都合3回、これを繰り返して、さらに3つの数字を客に言ってもらって6桁の数字を構成します。同じ数字を選ばれてもかまいませんが、ゼロはできるだけ避けます。この結果、ホワイト・ボードの上端に6桁の数字が書かれることとなります。それを今後の説明の便宜上、仮に、「175, 438」としておきます。この数字は、100万通りの中から選ばれた、たったひとつの数字であることを再度強調しておきます。しかしながら、6桁ですから、0から999, 999まで、理論上は100万通りありますが、実際は、始めから6桁に限定していますし、十万の位に最初に「1」を置いていますから、この言葉は正しくはありません。しかし、ここは言葉のレトリックで、このことに異を唱える観客は、まず、いませんから安心してください。それでも、こういうことが気になる方が読者の中にいらっしゃるといけないので、あえて言及しておきました。
- ⑥いま書いた6桁の数字の下方に線を引いておきます。以下の数字は、この線から下の部分に書くのです。ここで、「金庫」を取り上げます。「この中には紙が一枚入っている、と言いましたね？いまから、それをお客さんのおひとりに取り出してもらいます」こう言って、まず、ひとりの客に前に出て来てもらいます。「金庫」の周囲を見せて異常がないことを確認してもらったら、その客にも「金庫」が開くかどうか試してもらいます。もちろん開きませんから、そのあとで演者がいとも簡単に「金庫」を開けてみせます。開けたら、胴体を客に手渡して、中から折り畳んである紙を取り出させます。客の手で行なうことが重要です。
- ⑦「金庫」の役目はこれで終わりです。脇によけるかポケットにでもしまえます。紙を取り出した客に、折り畳んである紙を広げるように言います。「何が書いてありますか？」と訊ねると、客は、「数字が書いてあります」と答えます。ここで、客から紙を受け取って左手に掲げ、観客席に向かって示し、「5桁の数字が4つ書いてあります。無論、これらは、ここへ来るずっと前に書かれたものです」と言います。そして、ホワイト・ボード・マーカーを、その客に手渡します。
- ⑧ホワイト・ボードは観客のほうを向いて立っています。あるいは、立てかけられています。マーカーを持った客は、その前にいてホワイト・ボードに向かっています。これはもちろん、これから数字を書くためです。演者は、観客席側から見て、その客の左隣に位置するように立ちます。これ

らの位置関係は、以下の演技に非常に重要です。

- ⑨演者は、折り畳んであった紙を左手の中で、広げて見やすくするような形で親指を使って紙を押さえて、マーカールを持っている客に示します(図99)。上から3番目の数字が親指で隠れていることに注意してください。これは、折り畳まれていた紙を伸ばして客に示すために親指を置いているのです。このことが、封筒ではなくて、「金庫」の中に小さく折り畳んで入れておいた理由なのです。そして、これが、「金庫」を使うことの利点でもあります。3番目の数字を隠す指は、親指でなくてもかまいませんが、紙を挟んだ指が不自然にならないように注意します。また、後述するように、客はそれほど個々の数字に注目していないものですから、3番目の数字を完全に隠す必要はありません。

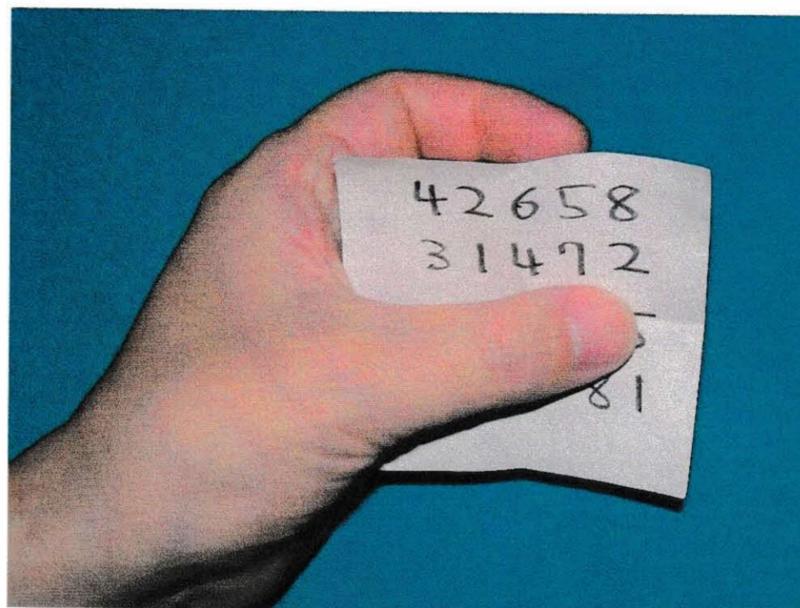


図99

- ⑩「まず、最初の5桁の数字を、その線(さきほど演者が書いた線)の下の方に書いてください。間違えないようにお願いします」こう言って、客に紙を見せますが、同時に演者は口頭で数字を言います。客は、書かねばなりませんから、紙を見るよりも演者の読み上げのほうに頼りがちになります。
- ⑪最初の数字を書いたら、「それでは、2番目の数字をお願いします」と言って、再び、図99のように一旦紙の数字を見せてから、読み上げて、客に書かせます。ほかの観客は、この時点で、マーカールを持った客が数字を確認して、それをボードに書いているように思い込みます。
- ⑫次の動きは重要です。客が2番目の数字を書き終わったら、「ちょっとずれていませんか?」とか、「まだ、3つほど数字を書きますから、全体のスペースを考えて書いてくださいね」と言います。言われた客は、自分が間違えていたかのような気持ちになり、緊張すると同時に心理的に焦るものです。そこですかさず、「3番目の数字を言いますから、バランスに注意して書いてください」と言って、紙を演者のほうにだけ向けます。そして、あたかも紙に書いてある3番目のダミーの数字を読み上げるような仕草で、実際は、ボードの上端に書いてある6桁の数字の万以下の各位の数字から「1」を減じた数字を読み上げます。すなわち、いま、ボードの上端に書いてある数字は、「175, 438」ですから、万の位の「7」から1を減じて「6」、千の位の「5」から1を減じた「4」、百の位の「4」から1を減じた「3」、十の位の「3」から1を減じた「2」、一の位の「8」

から1を減じた「7」で構成した5桁の数字、「64, 327」を読み上げるのです。もちろん、客は、その数字をボードに書きます。

⑬最後は4番目の数字です。今度は、親指をちよつとずらせて、一旦、紙を客に見せ、4番目の数字を確認させたあと、同じように読み上げて客に書かせます。書いたら、4番目の数字の下に下線を引いてもらいます。ここで、紙は演者のポケットにでもしまえます。

⑭「このボードの一番上に書いてある数字は、みなさんが任意に選んだ数字によって作られたものです。一方、いま、この方(客)に書いてもらった、その下の4つの数字は、あらかじめ、紙に書いて、ずっと前から、ここに置いてあったものです」と説明します。そして、今度は、演者がマーカーを持って、客の書いた4つの数字を足し算していきます。答えは、一番下に引いた線の下に書きます。それは、まさに、上端に書いてある数字「175, 438」になります(図100)。

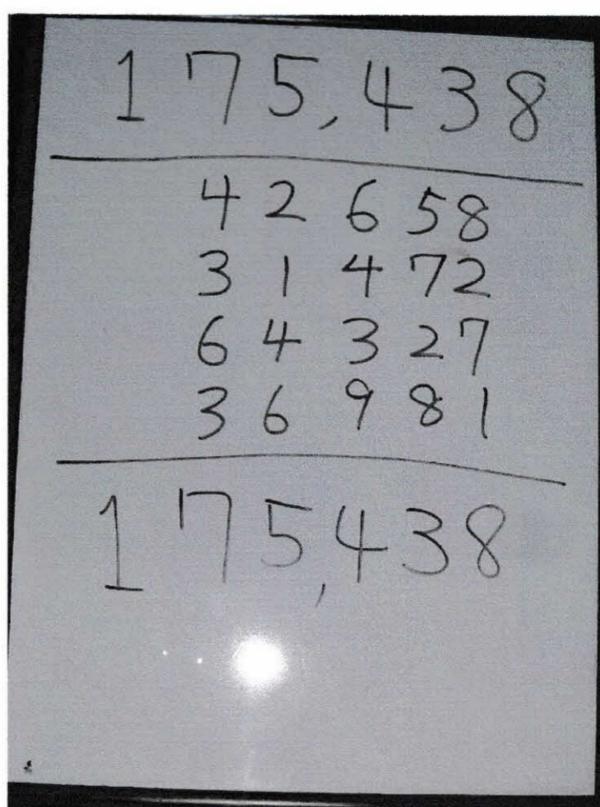


図100

[コメント]

足し算は、演者が声に出しながらやったほうがよいようです。客にやらせると間違えますし、その間違いを演者がすぐにわかるというのも変です。電卓を用意しておいて使うのも一興ですが、演者が声をあげて筆算で足し算している間は、それにしただがって観客もそれぞれ心の中で足し算している場合が多いので、やはり電卓を使わないほうがいいでしょう。私(麦谷)は、足し算が終わって、上端の数字と下端の合計が一致したことを示したあと、中間の4つの数字をただちに消すようにしています。なぜなら、これがすべての演技の最後ということは少なく、しただがって、このボードがしばらくそのままイーゼルの上に残っている場合が多いからです。じっと眺めていると、3番目の数字と上端の数字との相関に気づく観客がいないとも限りません。

言うまでもなく、3番目以外の3つの数字の合計が111, 111ですから、前述のように逆算して3番目の数字をセットすれば、合計が一致するのはあたりまえのことです。あたりまえのことを奇跡のように見せることに、実は「金庫」という小道具が重要な役割を果たしているのです。(M.M.)

最近の手品用具について（予告）

麦谷眞里

私は、手品を趣味として始めてから、相当長い間、純粋に手品が好きで本や用具を購入してきました。ところが、後年、原稿や本を書くようになってから、とりあえず興味のないものや、必要でないものでも、一応、購入して見てみるようになりました。これは、趣味としては不幸なことですが、おかげで、手品・奇術全般に対する理解が深まるようになりました。そこで、いろいろな手品用具について、その都度感じたことをときどき書いてみようと思います。

幸い、どこからも広告をとっているわけではありませんので、ある程度公平な目で評価できると思います。たとえば、盛んに宣伝しているジョン・ケネディの「カード・スルー・ウインドウ」という商品は価格が245ドル（約3万円）もしますが、あれ、自分の家以外で演れますか？そんなことを次号から書いてみたいと思います。

クローズ・アップ奇術専門誌 **MASQUERADE**

マスカレイド **PART 4** は、どなたでも購読できます。すべてカラー印刷、限定100部で、22ページから30ページです。また、予約購読を希望される方には、予約購読番号をお送りし、以後は、本誌が発行されるたびに自動的に送付いたします。内容は、下記の通りです。

1. **PART 4 No.1** デヴィッド・カッパーフィールドの「ムーン・カード」他。（在庫なし）
2. **PART 4 No.2** 「7つの鍵」、「カラー・チェンジング・ナイフ(2)」。（在庫なし）
3. **PART 4 No.3** 「真田紐の焼き継ぎ」、「カラー・チェンジング・ナイフ(3)」。
4. **PART 4 No.4** 「パノラミック・アンビシャス」他。
5. **PART 4 No.5** 「増加するマティーニ・ボトル」他。
6. **PART 4 No.6** 「紙玉の飛行」、「カラー・チェンジング・ナイフ(6)」。
7. **PART 4 No.7** 「コイン・ボックス(1)」、「リング・イン・バルーン」。
8. **PART 4 No.8** 「コイン・ボックス(2)」、「アロー・カード」他。
9. クラシック・エディション **No.1** 「ビル・イン・レモン」
10. クラシック・エディション **No.2** 「カラー・チェンジング・ナイフ」
11. クラシック・エディション **No.3** 「ザ・ワレット」

価格は、11. のみ3000円で、ほかはすべて2500円です。送料は1冊240円です。

ご注文・連絡は、郵便かメールでお願いします。（2002年11月）

雑誌が先に届きます。支払いは後です。同封の郵便振替か指定の銀行振込でお支払いください。現金書留はご容赦願います。

郵便の送付先：〒142-0064 東京都品川区旗の台3-15-1-208 マスカレイド

Eメール・アドレス：masqpart4@aol.com



edited by dr. masato mugitani
published by masquerade cooperation
part III no.9, december 2002

オープン・プレディクション物語

麦谷眞里

(はじめに)タイトルを見てすぐに、「ヘビーな題材を選んだな」と思われた方は相当なカード・マニアです。ポール・カーリーによって提案されたこのテーマは、当然にもカーディシャンたちの創作欲を刺激しました。すでに単行本や雑誌などで発表されているものだけでも相当な数にのぼります。これに、単売されている商品も加わりますから、それだけで一冊の本が構成できるほどで、事実、カール・ファルヴズなどは、小冊子ながらこれだけで一冊編集しています。

さて、もともと今回は、ロバート・パリッシュとラッカーボーマーの手になる「ワイド・オープン・プレディクション」という作品を紹介しようと思って書き始めたのでした。ただ、いきなりそれを解説しても、おそらく「ありがたみ」がわからないと思うのです。たとえば、マーローの「カーディシャン」で初めて「オープン・プレディクション」を覚えた人は、ぜひやってみたい手品だけれども、なんとなく胡散臭い両手の動きが気になって、なかなかスムーズに演じることができなかったはず。そういう苦労した経験があれば、この「ワイド・オープン・プレディクション」のあまりにも簡単なやり方に感心するのです。そうでなければ、1枚とはいえ、ギャフ・カードなんか使っておよそスマートじゃないカード・マジックだな、とってしまうのがオチです。

そこで、例によって沿革から入ることにします。カード・マニアの方の中には、そんなことはもうとっくに知っているという部分もあるかもしれませんが、きっと知らないことも含まれていると思いますので、少し我慢して読んでください

1955年に出た *Ibidem* の3号(図101)に、スチュアート・ジェイムスが、オープン・プレディクションに関する包括的な文章を書いています。それは、やや冗長で、決して切れ味はよくないのですが、一応、オープン・プレディクションの持っている性質が整理されていますので、とりあえず、そこから話を始めようと思います。ちなみに、図101の *Ibidem*3号は、近年になってリチャード・カウフマンやスティーブン・ミンチによって合本・販売された *Ibidem*(全3巻、各巻60ドルで3冊一緒に買うと160ドル)ではなくて、1970年代にカール・ファルヴズによってリプリントされたオリジナルに近い *Ibidem* です。ハワード・リヨンが創刊したカラー表紙の本物のオリジナルは、もともと50部しか印刷されていませんので、もとより私の手元にはありません。もっとも、内容を知るには、リタイプされた合本のほうがはるかに読みやすいですし、オリジナルのカラー表紙も、印刷ですが合本には収載されています。さらにタイプ・エラーなども直してあります。しかし、オリジナルの持っていた風合いというか、ハワード・リヨンらしい風変わりな独特の味を堪能するには、たとえリプリントでも図101のような原形に近いもののほうが適しています。ちなみに、*Ibidem* も途中10年ぐらい刊行されなかったり、突然再刊されたりして、そういう意味では親近感があります。

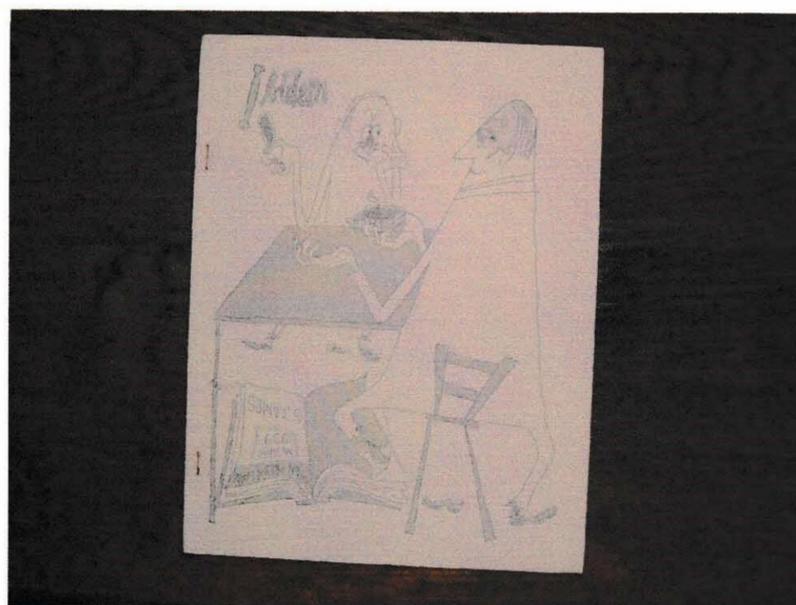


図101

さて、そのスチュアート・ジェイムスが整理・提案したオープン・プレディクションの特徴は次のようなものです。

- ①観客がデッキをシャッフルする。
- ②観客は予言されたカードをすでに知っている。
- ③観客は表向きになったカードの中に、予言されたカードを見つけることができない。

最後の③は、当然ながら、観客が選んだ裏向きのままのカードが、まさしく予言のカードであることを意味しています。

ここまで私は、読者の誰もが、オープン・プレディクションなるカード・マジックを周知のごとく書いてきましたが、ひょっとしたら、別のカード奇術と勘違いしていたり、あるいは、すっかり現象を忘れ

てしまっていたりしているひとがいるかもしれませんから、ここで現象を簡単に書いておきます。

[オープン・プレディクションの基本的な現象]

演者は、これから、デッキを表向きに1枚ずつ配って行くので、観客の好きなときにストップをかけてくれるように言います。そして、観客がストップをかけたところのカードだけを裏向きで配ることもあらかじめ説明します。さらに、その裏向きのカードが何であるかを前もって予言しておきます。つまり、最初から予言のカードを明らかにしておくのです。これが、オープン・プレディクションの名前の由来です。観客が任意のところでストップをかけると、演者はその1枚だけを裏向きで配り、再び残りのカードを表向きにしていけます。結局、1枚を除いて残りのすべてのカード51枚が表向きに配られますが、予言のカードはありません。すなわち、さきほど、観客がストップをかけて裏向きにしておいたカードだけが、まだ表を点検していないカードです。そのカードをデッキから探し出して表向きにすると、みごとに予言が的中しています。

以上です。これで、前述のスチュアート・ジェイムスの3つのポイントが理解できたと思います。この中でけっこう重い条件なのが、①の、観客にデッキをシャッフルさせることです。それはともかく、この3つのポイントを堅持しつつスチュアート・ジェイムスは、このあと、なんと25通りも、彼のやり方を解説しています。さらにそのあと、ハワード・リヨン自身が、11通りの方法を述べています。そのいずれにも私は食指を動かされませんでした。興味のある方は、まだ合本が売られていますので、購入されて試してご覧になるといいでしょう。

1. 私のポイント

私の考え方は、スチュアート・ジェイムスとはちょっと異なります。前述のように、最初にデッキを観客にシャッフルさせることがそれほど重要だとは思いません。それよりも、もっとも重要な要素は、予言がオープンになっているということです。

たとえば、「予言があります」と言いながら、実際はいくつもの予言を準備している手品があります。A、2、3、4、5、6の6枚のカードを使って、1～6のどの数字を選ばれても予言が当たるようになっている手品などはその典型です。あるいは、刑事コロamboでも使われた、3通りの予言を準備しておいて、観客がどれを選んでも当たったように見えるのも、その一例です。

仮に、オープン・プレディクションで、このような方法を使うことが許されるのであれば、バリエーションはおよそ無限に膨らみます。そこで、オープン・プレディクションにおいては、予言は唯一で、まさにそのカードを観客が選ぶ、ということに限定したいと思うのです。

そうすると、演者側の動きがおのずと制限されてきます。というのも、それは、言い換えると、オープン・プレディクションで予言したカードを観客にフォースするというところにほかならないからです。こういう書き方をすると、急に色褪せて見えませんか？しかし、予言の手品は、大なり小なり基本的にフォースなのです。したがって、タネそのものよりも、その演出や手続きが重要になってきます。その意味では、オープン・プレディクションの、観客が自分で(場合によっては演者が)デッキを表向きにしていって、中の1枚だけを裏向きにするという演出は、きわめて効果的です。52枚の中の任意の1枚を、観客自身が自由に選べるのです。この、「自由に」というところが大事で、私は、こ

の点に制限を加えたのでは、オープン・プレディクションではない、と思うのです。

以上のことから、私のポイントは、次の4つになります。

- ① 予言は前もって観客に伝え、それはひとつだけである。
- ② 観客はデッキの中から自由に任意の1枚を選ぶ。
- ③ 観客は52枚のうち、裏向きにした1枚以外に予言のカードがないことを表向きのデッキで確認する。
- ④ 裏向きのカードを表向きにひっくり返すと、まさしく予言のカードである。

もちろん、こうした構成要件は、自分の作品を考えるときには、都合よく解釈してしまうものです。特に、②の、デッキの中から自由に観客が選ぶという表現は、それは観客がそう思っていればいだけで、実際はフォースであってもかまわないわけですが、私がここで言っているのは、文字通り、任意の1枚を裏返しにさせる、ということです。

たとえば、1977年に「スペシャル・イフェクト」という本の中で、ポール・カリー自身が発表し、さらに2001年に出た「ワールズ・ビヨンド」に再録された作品は、私の上記4条件をすべて満たしている、と言えないこともありませんが、残念ながら、④で表向きにしたカードをテーブル上に出すことができないという、およそ、ポール・カリーらしからぬ欠点があります。

2. マーローの方法

エドワード・マーローは、「カーディシャン」に自分の作品を発表したあとも、いくつかのオープン・プレディクションの改案を発表しています。その中で、私(麦谷)好みのものは、1969年9月の「ハイエロファント」1号に発表されたものです。これは、1983年になって、「マーロー・ウイズアウト・ティアーズ」にもボーナス・イフェクトとして収められましたので、とりもなおさず、それほど難しくないのに効果的、という好作品です。ただし、ハンドリングなどのちょっと危険な箇所は、若干変えています。

[やり方]

- ① 予言するカード(この場合は便宜上スペードの10にします)をボトムから2枚目に表向きにひっくり返しておきます。言い換えれば、ボトムから2枚目を表向きにひっくり返して、それを予言のカードにするのです。そのまま、ボトムの2枚が変わらないようにしてデッキをシャッフルします。これは、キープしなければならないのがボトムの2枚だけですから、かなり自由にシャッフルすることが可能です。シャッフルし終わったらトップの20枚強をボトムに回します。これで、表向きのスペードの10は、トップから30枚目ぐらいになりました。
- ② 「これからあなたが選ぶカードを予言しておきます」と言って、「スペードの10」の名前を告げます。何気なくトップやボトムのカードを見せてもかまいません。デッキを客に裏向きのまま手渡します。「上から順に一枚ずつ表向きに配りながらテーブルの上に重ねて行ってください。そして、もし、スペードの10が出てきたら、配る手を止めてください」と言います。
- ③ 客が一枚ずつ表向きにしながらか配り始めたら、ひそかに心の中で12枚まで数えます。客が12枚目を置いたら、配る手を制して、「いつでもいいですから、自分のお好きなときに一枚だけ裏

向きで配ってください」と頼みます。そして、続けて表向きに置いて行ってもらいます。再び、心の中でひそかに枚数を数えます。通常は、次の12枚を配り終えるまでに、客は一枚のカードを裏向きに配るものです。客が、カードを裏向きに置いたら、「そのカードでいいんですか？」と確認します。

- ④客が裏向きのカードを置いたら、その枚数を30から引きます。たとえば、客が最初から22枚目を裏向きに置いたのなら $30 - 22 = 8$ です。スペードの10に到達するには、まだ8枚程度の余裕があるということです。そこで、さらにカードを表向きにする作業を続けてもらい、客が裏向きにしたカードから、さらに4、5枚置いたところで、客の手を止めます。これは、かなり注意しなければなりません。最初にトップからボトムに回すカードの枚数が少ないと、演者の思惑よりも意外に早く表向きのスペードの10が出てきてしまいます。
- ⑤「本当に、スペードの10はありませんでしたか？」こう言いながら、テーブルの上に重ねられた表向きのパイルをテーブル上にリボンスプレッドします。このとき、裏向きのカードの2枚上にあるカードを見て覚えます(図102)。説明の都合上、ここでは、そのカードをダイヤの5ということにしておきます。マーローの原案では、裏向きのカードのすぐ上のカードということになっていますが、実際に演じてみると、すぐ上のカードでは危険なことが多いので、このように2枚上のカードに変えました。

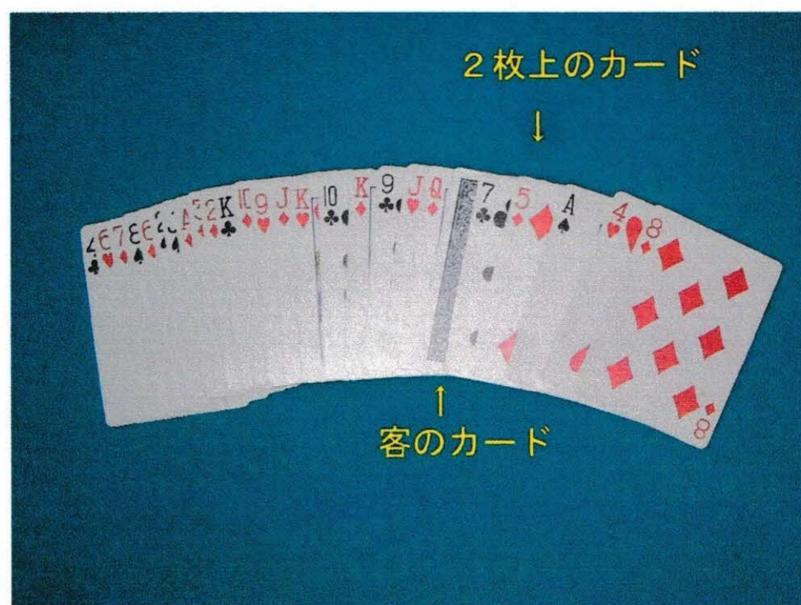


図102

- ⑥「確かに、この中にはありませんね。残りのカードはどうでしょうか？」こう言いながら、まず、テーブル上にリボンスプレッドしたカードを軽くまとめて、そのまま重ねます。次いで、客の手元に残っているパケットをもらいます。そして、このパケット全体を表向きにひっくり返してから、まず数枚を、テーブル上に表向きになっているパイルの上に一枚ずつ重ね出して行き、「ありませんね」と言いながら、残りのカードをすべてポンとテーブル上のパイルの上に表向きで載せてしまいます。ただちに、そのままデッキ全体を取り上げて、両手の間にやや広げて持ちます。
- ⑦表向きのデッキを少しずつ広げながら、一枚ずつのカードが客にもはっきりと見えるようにします。そして、「スペードの10でしたね」と言いながら、クラブの10やスペードの9のように似たようなカードに遭遇するたびにちょっと手を止めて、「これはちがいますね」と客の注意を喚起します。

⑧広げて行くと、最初の裏向きのカードが出てきます。これこそ、あらかじめひっくり返しておいたスペードの10です。ここで一旦手を止めます。「これは、あなたがさっき裏向きに置いたカードです」と言います。ここで、この裏向きのスペードの10をちょっとだけアップジョグしておきます。この少し先に、さきほど覚えたダイヤの5があるはずですが、この2枚下に、客が本当に裏返したカードがあります。したがって、ダイヤの5のすぐ下のカードとさらにその下にある客の選んだ裏向きのカードとは、ブロックとして左親指で一緒に右へ送ってしまいます(図103)すなわち、もう一枚の裏向きのカードの存在を客に悟られないようにするのです。



図103

⑨デッキを最後まで送ってしまったら、客の顔を見ます。デッキはそろえないで両手の間に軽く広げたままにしておきます。「スペードの10はありませんでしたね。それでは、あなたが途中で裏向きにしたカードを見てみましょう」デッキを左手で持って、右手で、ファンの中に見える裏向きのカードを抜き出します。ゆっくりと表向きにすると、まさしくスペードの10です。

[コメント]こういう手順を読むと、すぐに、ラフ・アンド・スムーズとか、マジシャンズ・ワックスを使って、裏向きの客のカードを処理するためにほかのカードの下にくっつけてしまおうと考える人がいますが、そんなことをするくらいなら、もっと凝ったいい手順があります。ここでは、そんなものを使わないで行ないたい、というエドワード・マーローの工夫を尊重してください。

3. ワイド・オープン・プレディクション

今回は、もともと、これを解説するために書き始めたのでした。これを読んだら、実際に鏡の前でも演ってみてください。素晴らしいオープン・プレディクションです。スチュアート・ジェイムスもご本尊のポール・カリーもびっくりです。手品は、やはり単純なほどいいのです。もともとの原案は、ロバート・パリッシュです。

[必要なもの]

ダブル・フェイス・カードが1枚必要です。説明の都合上、9H/QS(ハートの9とスペードの12)ということにします(図104)。もちろん、どんなものでもかいません。ただ、ジョーカーとかエースは

避けたほうがいいでしょう。このダブル・フェイスをデッキのボトムに置いておきますが、説明の都合上、ハートの9がほかのカードと同じ側を向いているようにします。すなわち、デッキを裏向きで持ったときに、ボトムにスペードのQだけが表向きでひっくり返って見える状態です。普通のハートの9とスペードのQの2枚をデッキから抜いておいてください。

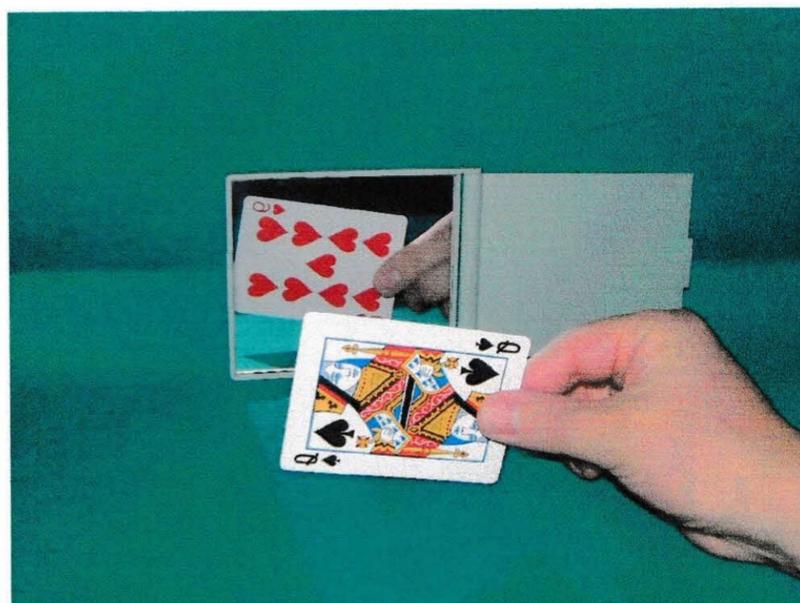


図104

[やり方]

- ①デッキをよくシャッフルします。ダブル・フェイスたった1枚ですから、それが観客から見えなければ、どのようにシャッフルしようと、そんなに困ることはありません。最後に、ちょっと裏を自分のほうに向けてスペードのQを探し、それがボトムに来るように一回カットすればいいのです。
- ②シャッフルしたデッキを左手に裏向きで持ちます。ボトムにはダブル・フェイスがあります。「これから、一枚ずつカードを表向きにして重ねて行きますので、お好きなところでストップと言ってください。その場所のカードだけは裏向きで配りますが、あなたがストップというのは、スペードの12のところですよ」と予言しておきます。そして、左手に裏向きで持ったデッキから一枚ずつ表向きにしてテーブル上に重ねて行きます。ただし、客が、あまり早くストップと言わないように、「もっとも、スペードの12が出てしまってからでは身も蓋もありませんから、表向きにして行くカードの中にスペードの12がないかどうか確認してってくださいね」と話しかけながら表向きにして行きます。この台詞だけで、15枚ぐらいいは置けるはずですよ。
- ③客がストップと言ったら、その次のカードを裏向きでテーブル上のパイルの上に出します。「このカードでいいですか？いまなら、まだ変更できますよ」と訊きます。客が満足したら、そこで、左手に残っているカード全体を表向きにひっくり返します。すると、ダブル・フェイスのハートの9が一番上になります。このハートの9を、そのまま裏向きの客のカードの上に載せます。続けて、その次のカードも、表向きのまま、さらにその上に重ねて置いて行きます。「残りのカードの中にもスペードの12がないかどうかチェックしてくださいね」こう言いながら、左手に残っているカードをすべてテーブル上に一枚ずつ出して行きます。もちろん、スペードのQはありません。
- ④「スペードの12はありませんでしたね」こう言って、テーブル上のデッキを取り上げます。一旦そろえてから、両手の間に表向きで広げ、裏向きのカードを探します。この裏向きのカードを客に

強調しつつ、あたかもこの裏向きのカードを両手でアップジョグするような手の形にします(図105)。ここが、非常に巧妙なところですよ。



図105

⑤このまま両手を立てて、ファンに広げたデッキの裏を観客に見えるようにしながら、左手の親指で裏向きのカードを左に引いてしまい、同時に右手は逆にダブル・フェイスのハートの9を上方に引き出しつつ上に動かします。したがって、ファンはやや閉じられる形になりますが、完全には閉じません。図106は、このときの動きの中間点です。図では動きだけを示すために背景はありませんが、実はこのとき、デッキの向こう側には、観客の顔があります。以上の動きは、裏向きになっている客のカードだけをデッキからアップジョグして、その表が客から見えるようにデッキ全体を立てて見せる、という一連の動作です。そんな大胆なことができるかと思われるかもしれませんが、できるのです。当然ですが、客からはダブル・フェイスの反対側のスペードのQが見えていますので、客は予言が当たったことに驚いています。

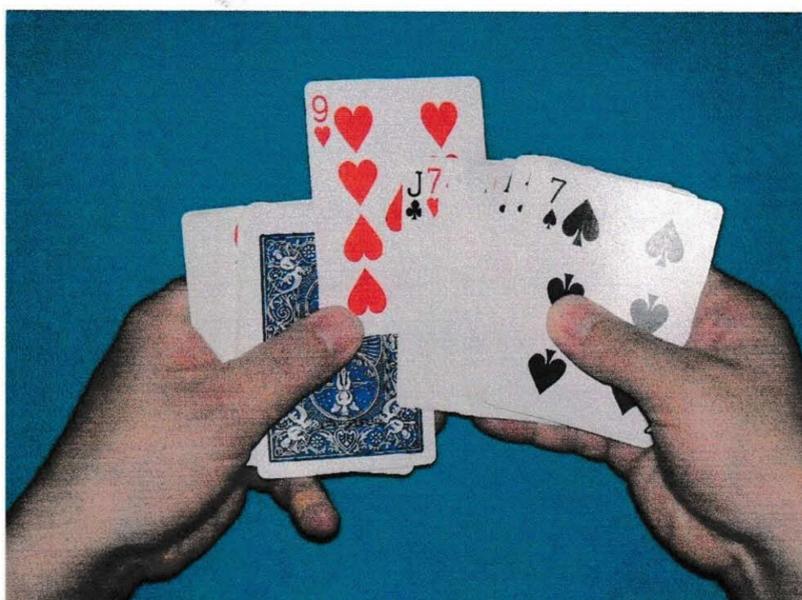


図106

⑥デッキを立てたまま、ダブル・フェイスを右手で抜いて、スペードのQが上になるようにしてテーブルの上に投げ出します。そうです。投げ出すのです。この無造作な扱いが、ダブル・フェイスであることをカムフラージュしてくれるのです。素晴らしいオープン・プレディクションでしょう？

スワミ・ギミックについて

麦谷眞里

(はじめに)スワミ・ギミックというのは、ネイル・ライターとかサム(親指)・ライターと呼ばれる道具のことです。文字通り、ひそかに指先につけて、それで観客の気づかないうちに数字や文字を書くのです。もともと偽の霊媒や超能力者が使っていたものでしたが、1921年に、Claude Alexander という人によって奇術界にもたらされた、と Whaley の本には書いてあります。もう少し、由来を書くと、スワミは、ヒンズー語の、swami から来ていて、もともとの意味は、支配者、領主、君主(王)ということです。梵語(サンスクリット)の svamin から来ています。したがって、英語の意味も、ヒンズー教の学者や宗教家に対する尊称になっています。

スワミ・ギミックは、日本ではあまり使われませんが、欧米の奇術用具店からは、爪にはめるタイプのものや、バンド型のものなど、いろんな形のもので売られています。

日本で使われないのは、どうも偏見があるように私(麦谷)は思います。というのは、おそらく日本で草創期にネイル・ライターを使った人々が、薄い鉛筆のような書き具合に満足できなくて、これは実用的でないと決めてしまったのだと思います。いまでも、このギミックの有用性に懐疑的な記述をされている奇術家の方がおられるので、この類推はほぼ正しいように思われます。しかし、それは一種の誤解です。もうひとつ、このギミックが使われないのは、使ってみたいと思う素晴らしい作品がないのもその一因です。

そのため、私は、**masquerade Part4-No.9** でスワミ・ギミックを上手に使う、「風船ガムの個数」という素晴らしい手品を紹介しました。読んだだけでは、演ってみようと思わないかもしれませんが、それでも、こんな使い方をするんだということを紹介しただけでも意義があると思っています。その手品は、Lee Earle という人が編集・発行しているメンタルマジック専門誌”SYZYGY”でベスト作品に選ばれたもののひとつです。興味のある方は、ぜひ参照なさってみてください。

この Lee Earle というおじさんは、実は演技があまりうまくありません。もちろんそれは、ラリー・ベッカーなどと比べたときの相対的なもので、普通の観客が見たら十分に評価できるものです。ところが、それにもかかわらず、このひとは自分の演技で実にたくさんのメンタルマジックのビデオを出しているのです。その中に、まさにスワミ・ギミックだけを扱ったものがあります。題して、”Swami Gimmick Teach-In”。ディーラーでは35ドル(約4200円)です。このビデオには、6つのスワミ・ギミックを使った作品が収められ解説されています。中には、ドイツのテッド・レスリー(彼のメンタルマジックは素晴らしいですよ)のアイデアになる、客のポケットの小銭を当てるなどの作品もありますが、残念ながら、どれもこれも面白くありません。つまり、6つも収められている割には大同小異なのです。それは、あたりまえで、所詮、スワミ・ギミックは、紙にごちゃごちゃ書く手品だと言ってしまえばそれまでです。リー・アールは、うれしそうに、スワミ・ギミックでパースデー・ケーキのキャンドルなどを書いてみせますが、私などはビデオを見ていて溜息が出ます。つまり、スワミ・ギミックでは、真っ直ぐなキャンドルを書くことはできても円形のケーキなどは書けないのです。もちろん、演出上、ケーキは始めから書いてありますからスワミ・ギミックで書く必要はないのですが、限

界を見せつけられたような気分になります。

ただし、このビデオには、最後にスワミ・ギミックの作り方が詳細に説明されていますので、購入する価値は十分にあります。というのも、ちょっと気の利いたスワミ・ギミックになると、このビデオの値段よりも高いからです。リー・アールが面白いのは、自分でもスワミ・ギミックを販売しているながら、こうして安く自分で作れるのだから高いものをディーラーで買う必要はない、と暗に言っていることです。そういう意味でも、彼はまだまだアマチュア精神のあるマジシャンなのです。好感がもてます。

さて、実は、そのスワミ・ギミックの作り方が問題です。ここでは、リー・アールの作り方を参考にしながら、日本で入手できる材料で、できるだけ実用に足るスワミ・ギミックを作り、それで、ちょっと演ってみたくなるような手品を考えてみたいのです。

1. マスカレイド・タイプのスワミ・ギミック

ネイル・ライター最大の弱点は、字が薄いことと、しっかりした字が書けないことでした。そして、それが日本であまり使われないことの原因でした。言い換えれば、字を濃くして、しっかりした文字を書けるようにすれば、その欠点は是正されるということです。もともと観客には気づかれないで使える道具のわけですから、欠点が克服されれば、かなり有用なものになると思われます。

ちょっと考えただけでも、アル・コーランの「メダリオン」はどうでしょうか？

実は、こんなふうにメンタルマジックでの使い方ばかり考えると、そもそもの限界があるように感じます。そこで、メンタルマジックのことはしばらく忘れて、当面は、しっかりした頑丈なスワミ・ギミックを作ることに専念しましょう。

[準備するもの]

- ①ギターのピック1個：手に持って使う三角形のタイプのものではなくて、指にはめて使う方式のものです(図107)。普通の楽器店ならどこでも売っています。プラスチック製のものでせいぜい1個100円～200円程度です。お琴の演奏でも似たようなものを使うらしいのですが、そっちのほうは私に知識もないし、どこに売っているのかもすぐにはわからないので、調べてありません。読者の方で、そちらの方面に詳しい方がおられたらご教示ください。
- ②ハトメ(鳩目)・パンチと鋏1個：家などにある方はそれらをお使いください(図107)。ない方は購入しなければなりません。パンチのほうは2000円くらい、鋏は250個入りで150円程度です。鋏は、親指から汗の出ることを考えると、鉄製よりも真鍮製のもののほうがよいでしょう。手品に使う場合は、実際の演技のときでも予備のためにギミックを最低2個は用意しておかねばなりませんし、使ってみると、ひとつひとつの欠点に気が付いて、自分でも作り直してみたくくなりますから、作製のための道具を購入しておいてもまったく無駄にはなりません。
- ③アイライナー・ペンシル1本：女性の化粧用の細いペンシルです(図107)。黒いものにします。なにしろ、肌を書くわけですからかなり柔らかいですし、紙に書くと十分に濃い文字になります。これもそんなに高いものではなく、1本300円～600円程度です。
- ④肌色のスプレー：肌色のラッカーでもかまいません。できあがったスワミ・ギミックを目立たない

ように肌色に塗るためです。私は、例によってバンド・エイドで包んで使います。



図107

【作り方】

- ①ギター・ピックの爪のほうにハトメ・パンチで穴を開けて鋳を打ち込みます。ハトメのスムーズな面のほうが親指に当たるように打ち込みます。また、ピックの爪が長過ぎるようでしたら、穴をやや根元の方に開けて、余分の爪は鋏などで短く切って、かつ丸くトリミングしておきます。
- ②この状態で、スプレーやラッカーで肌色に塗っておきますが、図108のものは未塗装です。
- ③ハトメの穴に、アイライナー・ペンシルの芯を短く切って入れます。ちょうど、親指にはめたときに、親指の腹の位置の向こう側にペンシルの芯の先が出るようにします。ペンシルの太さによって、そのままの状態で動かないように固定できるものはいいいですが、もし、ぐらぐらするようでしたら、何か緩衝材と接着剤を入れて固定します。普通は、接着剤を挿入するだけで十分です。
- ④ギター・ピックは、もともと人差指や中指などの指にはめるようにできていますから、太い親指にはめると、かなりしっかりと固定できるはずですが、これで、マスカレイド・タイプのスワミ・ギミックが完成しました(図108)。ただし、図では便宜上、敢えて未塗装のままにしています。



図108

- ⑤完成したら、実際に親指にはめて、親指の腹のアイライナー・ペンシルの芯で紙に文字などを

書いてみてください。確かにあまり複雑なものを書くのは無理であることがわかると思います。でも数字とかアルファベットなら、なんとか、しっかりと濃く書けそうな感じではありませんか？もうひとつ大事なことは、書く紙です。腰のない薄い紙では、台紙でもない限り片手で書くのは無理です。したがって、少なくとも名刺に使われるようなやや厚手の紙を使うようにします。

2. 考察と応用

[まず考察]

- ①リー・アールが解説しているスワミ・ギミックを使う手品にはどういうものが多いかということ、観客と話をしながら、紙にひそかに何か書いていく方式が圧倒的です。つまりこうです。たとえば、観客のポケットの中の小銭を予想すると言って、紙に何か書きます。それを最後に観客に見せたときには、「あなたのポケットの中には、〇〇円の小銭があります」と書いてあるわけです。演者は、最初、メモ用紙に、この「〇〇円」のところだけ空欄にして書くのです。もちろん観客には見せませんし、観客には演者が小銭の高を予想して何か特定の数字を書いたように思い込ませねばなりません。そして、筆記用具をポケットなどにしまってから、ひとりの客にポケットの中の小銭を数えてくれるように頼むのです。客が数えて、たとえば、463円と答えると、演者は驚いたふうを装います。「ほんとうですか？」などと訊きながら、スワミ・ギミックで、〇〇の箇所に、当該の463と数字を書き込むのです。あとは推して知るべし。
- ②メモ用紙の持ち方などに注意すれば、何か書いているなどと思われることは、まずありません。というのも、一般の観客は、親指にそんなものが付いているとは夢にも思わないからです。中には、利き腕でないほうの親指で書くべきだ、などというマジシャンもいますが、そのことにはあまり拘泥する必要はありません。ポケットの中の小銭のバリエーションとしては、それこそ客の誕生日でもいいし、何か記念日でもかまいません。およそ数字で表現できるものなら、どんなことでもできるのです。そういう意味では、確かに有用な小道具なのです。
- ③ところが、そうは言っても、マジシャン側の良心としては、メモ用紙の上でカシャカシャと親指を動かすことには、どうしてもうしろめたさが伴います。さらに、もっと困惑するのは、相手の返事を聞いてから、それを、「ほんとうですか？」などと言いながら目の前で書き込む動作で、これは、リー・アールの演技でさえ私は嘘臭く思うのですから、日本の読者の皆さんが行なうのは、かなり抵抗があると思います。ただし、あくまでも心理的なものです。念のため。
- ④そこで、せっかく良質のスワミ・ギミックを作ったのですから、もう少し堂々と書いて、かつ時間差でそれを使うようなやり方を考えてみました。

[そして応用]

- ①フレッド・カップスのアイデアである、指輪の箱の中の4つ折りカードを用意してください。ご存じない方のために、作り方を簡単に述べますと、カードを4つ折りにして、糸で指輪の箱と繋いでおきます。指輪の箱の蓋を開けると、四つ折のカードがあります。動くのであたかも単にカードが入っているように見えますが、箱を逆さまにすると、カードは糸で繋がっているため落ちては来ません(図109)。私は、これが好きでよく使います。今回もこれを使います。



図109

- ②作ったスワミ・ギミックは、ズボンの右ポケットにでも入れておきます。あと、デッキの中にblankフェイスを1枚入れておきます。もちろん、裏の模様はデッキ全体のものと同じものです。入れる位置はどこでもかまいません。あとでじっくり探し出します。上着の左ポケットにサインペンを1本入れておきます。
- ③すべての演技の最初に、準備した指輪の箱をテーブルの上に出します。何も言う必要はありません。説明もしません。ただ、置くのです。置く位置は、演者から見て右前方の、できるだけ観客に近いほうの位置です。
- ④デッキを出して、いくつかカード・マジックを行ないます。ただし、blankフェイスの存在が見えてしまうような手順は避けます。どうしてもそのような手順を行ないたければ、デッキを表向きにファンに広げれば、blankフェイスの位置はすぐにわかりますから、そこでカットして、使うのを避けるようにします。
- ⑤いくつかのカード・マジックを見せたあとで、観客のひとりにおもむろに、「自分の記念や思い出になるような2桁の数字を思い浮かべてください。自分の年齢でもいいし、生まれた年の下2桁でもいいですし、結婚記念日の日にちでもいいです。ただし、必ず2桁にしてください。すなわち、10から99までの間の数字です」と言って客が思い浮かべるのを待ちます。
- ⑥ここで、デッキをその客に渡します。「それでは、その2桁の数字を思い浮かべながら、トランプをよく切ってください」と頼みます。そして、この間に、「いったいどんな数字でしょうか？ 私にも、ほかのみなさんにもわかりませんよね」と言いながら、何気なく右手をズボンのポケットに入れてスワミ・ギミックを右手の親指に嵌めます。これはちょっと練習が要ります。
- ⑦客からデッキを受け取って、表を演者に向けて両手の間に広げます。まず、blankフェイスを見つけそれがボトムに来るようにカットします。つまり、blankフェイスが一番右側に来ます。客に向かい、「あなたが選んだ2桁の数字にしたがって2枚のカードを選ぶことにします。たとえば、27なら、2と7です。36なら3と6です。いくつでしたか？」と訊ねます。客が答えたら、「なるほど」と言いつつ、その2枚を探しますが、同時に、右手のスワミ・ギミックでblankフェイスの上に、その数字を書きます。これは、客の言った数字のカードを探しながら行ないますから、か

なり親指が動いても怪しまれません。さらに、たとえば、2と7であっても、スーツは決まっていますから、客に、「ダイヤとかハートとかご希望はありますか？」などと、さらに質問しながら行なえば、ミスディレクションは完璧です。

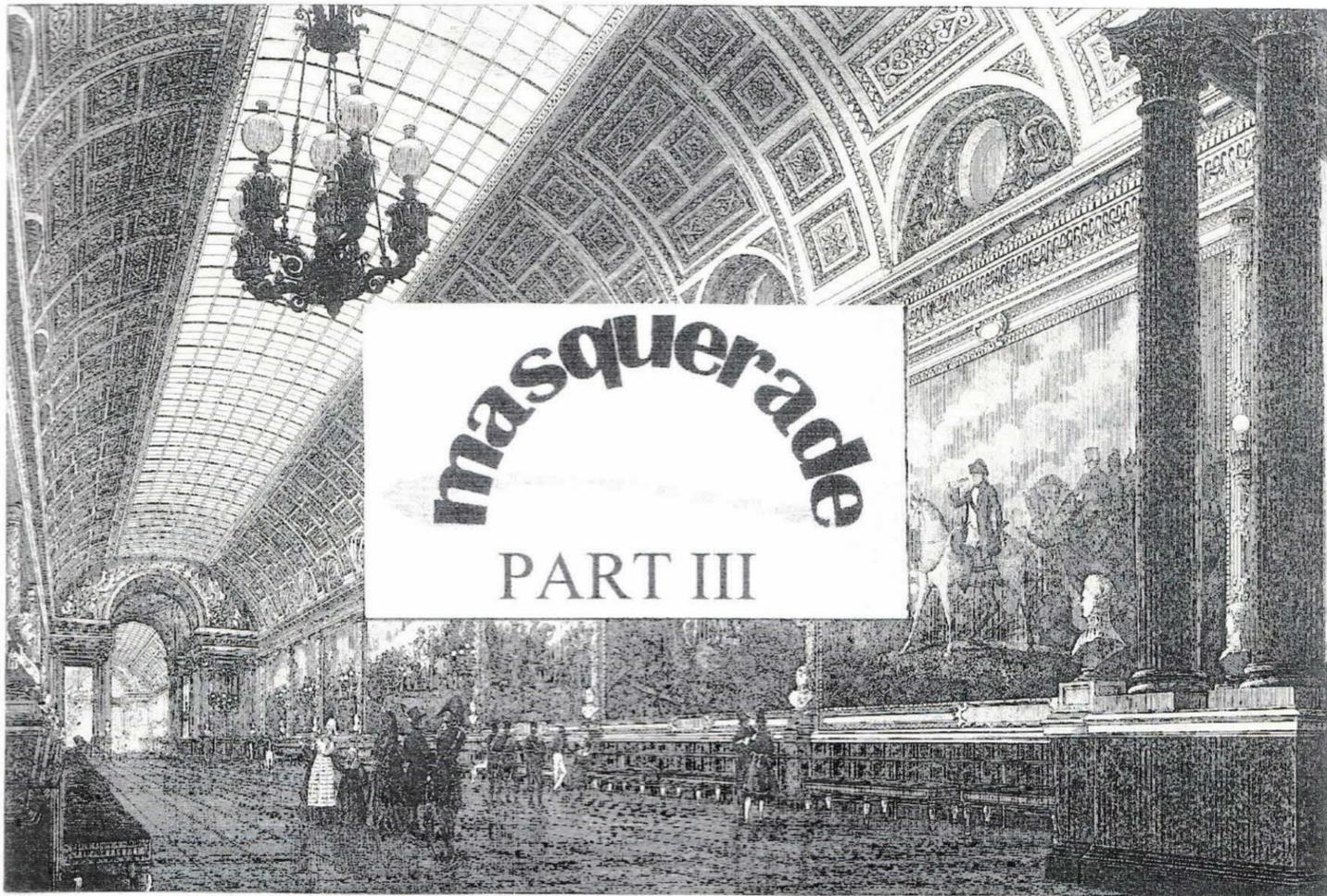
- ⑧客のカードを2枚(あるいは8枚でも可能です。これは演者が次に行なうカード・マジックによります)出したら、デッキを裏向きで左手に持ちます。そして、客に、「もし差し支えなかったら、どんな記念の数字なのか教えていただけますか？もちろん秘密でもかまいません」と言いながら、デッキの上から右手を添え、ボトムのブランク・フェイスを四つ折りにします。このやり方には、いろいろな方法がありますが、ひとつは、**masquerade Part3-No.1** の「ホーミング・カード・クライマックス」に詳述してありますのでご参照ください。
- ⑨デッキと四つ折りカードとを左手に持ったまま、まず右手を上着の右ポケットに入れて、スワミギミックをはずして置いてきます。すぐに空手を出しきて、その右手でデッキを上から掴み、左手は四つ折りカードをパームして上着の左ポケットに入れ、カードをそこに置いて、サインペンを出してきます。サインペンを探すという、流れるような一連の動作です。
- ⑩これで、両手は自由ですから、客の指定した2枚あるいは4枚か最大8枚のカードで適当なカード・マジックを行ないます。2枚なら、サインさせてサンドイッチ・カードに使うのもいいですし、8枚なら、オイル・アンド・ウォーターとかフォロー・ザ・リーダーに使えます。いずれも、出したカードにはサインペンでサインさせます。使い終わったサインペンは、テーブルの左手前に置いたままにしておきます。
- ⑪一連のカード・マジックが終わったら、デッキをテーブルに置いて、サインペンを左手で取り上げて上着の左ポケットにしまい、ポケットの中の四つ折りカードをパームする準備をします。ほとんど同時に、右手でテーブル上の指輪の箱を指差します。「この箱は、ずっとここにおいてありましたね」そう言って、右手は指輪の箱を取り上げます。同時に左手は再び4つ折りカードをパームして出してきました。両手で指輪の箱を持って右手で蓋を開けて中のカードを観客に見せます。右手で持っている箱を傾けて、あたかもカードを左掌に空けるようにします。同時に左手を開いて、パームしていたカードを示します。タイミングが大事です。蓋はパチンと右手で閉じます。客からは、指輪の箱の中のカードを左手に空けたとしか見えません。
- ⑫客に、「さきほどのあなたの記念の2桁の数字というのは、あなた以外の誰かが想像できたと思いますか？」と訊ねます。客は、首を左右に振りますから、その客に四つ折りカードを渡して広げるように言います。自分の心に思った数字がそこに黒々と書いてあるので客は声を上げること必至です。

ご注文・連絡は、郵便かメールでお願いします。(2002年12月)

雑誌が先に届きます。支払いは後です。同封の郵便振替か指定の銀行振込でお支払いください。現金書留はご容赦願います。

郵便の送付先: 〒142-0064 東京都品川区旗の台3-15-1-208 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com



edited by dr. masato mugitani
published by masquerade cooperation
part III no.10, January 2003

ひっくり返るカード

麦谷眞里

(はじめに)エドワード・マーローは、どういうわけか日本では、ダイ・バーノンなどに比べて、紹介されている作品の質も量もいまひとつです。推察できる理由はいくつもありますが、本当のところはよくわかりません。かなり早い段階で、「カードファン・プロダクション」などが訳されて刊行されていますから、決して知られていなかったのではないのです。アメリカ合衆国に、マーローの信奉者があだけいるのに比べると、日本では私を含めて数人もいないのではないかと思えるほどです。

たとえば、私は、ダイ・バーノンには何度も会ったことがありますし、直接言葉を交わしたこともあります。また、私のカード・マジックを見せたこともあります。ところが、エドワード・マーローとは、たった一回、電話で直接話したことがあるだけで、会ったこともなければ、演技を見たこともありません。それは、マーローが飛行機嫌い、旅行嫌いであったこととも無縁ではありません。マーローが出かけていくマジック・コンベンションは、シカゴ近辺で行われるものか、せいぜい、ミシガンのアポットの大会ぐらいだったからです。

まあ、だからといって、いまさら残念だなどと思っているわけでもないのです。というのも、あの分厚くて何冊もあるマーローズ・マガジンは、まだ制覇できていませんし、見てないビデオもけっこ

うあって、まだまだ研究の余地があるからです。

そういうわけで、私としては、意識的にマーローの作品を基にした題材を取り上げることが多いのです。

1. ひっくり返るカード

これは、マーローが IBM の機関紙”The Linking Ring”の、1956年10月30日号に発表した、”TOUCH TURN”という作品を基にして私(麦谷)が構成したものです。使われている技法も、私流に変えてありますので、本来のマーローのやり方を知りたい方は、リンクング・リング誌を参照してください。と、こう書くと、いままででしたら、いまから47年も前の手品雑誌を探すのはたいへんでしたが、幸いなことに、昨年、マーロニアン(エドワード・マーローの信奉者たち)のひとりである Randy Wakeman が、リンクング・リング誌に掲載したすべてのマーローの原稿を集めて一冊にした”Marlo in The Linking Ring”という本を刊行してくれたので、探すのが容易になりました。リンクング・リング誌そのものは、創刊号からすべてがCD-ROMになって販売されていますので、もちろんそちらで探すことも可能です。

[現象]演者が示した5枚のカードのうち、客のカードだけが2度ひっくり返ります。

- ①準備はまったく要りません。デッキを客に渡してシャッフルしてもらいます。十分にシャッフルしたら、デッキのトップから5枚のカードを取って、デッキの上に表向きにラフにひっくり返してから、右手を使って、この5枚をデッキの上に広げます。そしてこのとき、6枚目の、裏向きのカードの下に左小指でブレイクを作っておきます。「この5枚の中で、好きなカードを一枚選んで覚えてください。まだ黙っていてくださいね」と言います。
- ②広げた5枚を一旦閉じて、再び右手で取り上げますが、このときブレイクから上の裏向きのカードを加え、6枚を一緒に取り上げます。デッキは脇に除けておきます。ポケットを左手に持って、右手でカードを一枚ずつファンに開くようにします。カードの順序は変えません。最後の2枚は左手に1枚のように持っています(図110)。



図110

- ③「さて、この中にあなたの覚えたカードはもちろんありますね？それはなんでしたか？」と訊ね

ます。説明の便宜のために、客の選んだカードがダイヤの7だったとします。5枚(実際は6枚)のファンを左手に持って、右手でダイヤの7を抜き出します。ただし、ダイヤの7が5枚のうち一番下のカードだったら、そのまま抜き出すと裏向きのカードが見えてしまいますから、その場合だけは、抜き出す動作の中で、一旦、その上のカードと裏向きのカードとを揃えてから抜き出します。抜き出したダイヤの7は、左手に広げられた4枚のカードの中央に、少しアウトジョグした状態で差し込みます。そのままポケットを閉じて、アウトジョグしたダイヤの7を押し込んで揃えます。

- ④左手から右手に、上から順にカードを取って行きますが、今度は、カードの順序が逆になるようにします。最初の2枚を取ったら、その上にダイヤの7を今度も少しアウトジョグして取ります。左手に残った2枚(実際は3枚)は、そのまま右手のカードの上に乗せて、ポケットを両手で閉じます。アウトジョグされたダイヤの7を押し込んでポケットに揃えます。これで、表向きのダイヤの7を2回確認しました。
- ⑤ポケットを左手に持って、右手を上からかけて揃えながら、ボトムから2枚目のカードの上に左小指でブレイクを作ります。これは、右手の親指を使って、手前の端を数え上げながら行ないます。「ご覧ください」と言って、右手で左手のポケットの一番上のカードを取り上げます。その下に、2枚目のカードをファンに開いた状態で取ります。3枚目のカードは裏向きで出てきますから、ブレイクから上の2枚を1枚のように右手のカードの下にファンに取ります。さらに左手に残った2枚を1枚ずつファンに取ると、あたかも客の選んだダイヤの7だけが裏向きにひっくり返ったように見えます(図111)。文章では、動きをひとつひとつ書きましたが、以上の動きは止まることのない一連の動作です。



図111

- ⑥ポケットを閉じないで、右手で、裏向きのダイヤの7(?)までの上から3枚(実際は4枚)のカードを取り上げます。左手に残った2枚は、親指を使って2枚同時に裏向きにひっくり返します。ひっくり返しても、少しファンに開いたままにしておきます。ここで一旦、右手のカードを左手の裏向きの2枚の上に置きます。ファンは開いたままです。今度は、左手で、裏向きにしたばかりの2枚のカードの上に、右手から加えた裏向きのダイヤの7(2枚)を持って、右手は表向きになっている2枚を取り上げます。この2枚を、やはり右親指を使って裏向きにひっくり返し、ひっくり返し

た2枚の間に左手の裏向きの3枚(4枚)を入れて(図112)、パケットを揃えます。「これで、再び、すべてのカードが裏向きになりました」と言います。



図112

- ⑦パケットを裏向きで左手に持って、そのまま広げます。ボトムは、1枚のようにして持っています。すると、パケットの中央に再びダイヤの7だけがひっくり返っています。このダイヤの7を右手で抜き出してテーブルの上に置き、左手のカードはそのままデッキの上に戻します。これで余分の1枚は処理できました。ダイヤの7を示しながら、「あなたは不思議なカードを選びましたね」と言って終わります。

2. オフカラー

上の手順の最後のところで、テーブルに出したダイヤの7の裏の色が異なっていたら、素敵なクライマックスになると思いませんか？

ミルトン・コルトが、1970年に、「オフカラー・カード・トリックス」という妙な小冊子を出しました。これは、たとえば、フォア・エースを演じたあとで、4枚のエースをひっくり返すと裏の色が変わっているというもので、手品としては邪道ですが、鬼面人を驚かすような効果があるため、私も一時凝っていました。

さて、上の手順でそういうことが可能でしょうか？選ばれたダイヤの7は、一度も裏向きになっていませんので、実は可能です。最大の障害は、客に、この、裏の色の異なったダイヤの7を選ばせることで、それさえ成功すれば、これは大成功です。

それを少し検討してみます。そのため、デッキを青裏、ダイヤの7を赤裏ということにします。ただし、特定の赤裏カードを使う以上、客にデッキをシャッフルさせることは、とりあえず、あきらめなくてはなりません。

- ①もっとも安易な方法は、フォースです。赤裏のダイヤの7を青裏のデッキのボトムにセットしておいて、それをヒンズー・シャッフルなどでフォースしたあと、さらに4枚のカードを加えて、上の手順を行ないます。客の選んだダイヤの7だけがひっくり返るといふ手品そのものの効果には変化がありませんが、なんとなく気乗りのしない解決方法です。

- ②これをもう少しエレガントにするには、メンタル・フォースというアプローチがあります。ダイヤの7は、選ばれやすいカードです。したがって、そのほかの4枚を工夫しなくてはなりません。構成としては、黒を3枚、赤を1枚ということにします。黒は、スペードのキングとスペードの4は、誰もが敬遠しますから、それを入れます。残りはクラブですが、クラブの9も忌避されやすいカードですからこの3枚にします。難しいのは赤で、ハートを入れなくてはいけませんが、この組み合わせで選ばれにくいハートのカードは2か8ですので、この際2にしておきます。整理すると、表向きにして、上から順に、9C, 7D, 4S, 2H, KSの順に重ねて5枚です。順序も大事です。以上の選択には、まったく根拠はありません。科学的でもありません。ダイ・バーノンの5枚でもいいと思いますが、テーブルの上に広げるわけではないので、視覚に訴える感じがちょっと異なります。この組み合わせでは、クラブの9を選ぶひともたまにいます。もちろん別な組み合わせでもいいです。逆にハートの絵札を赤裏にして、それを選ばせる手もいいかもしれません。いずれにしても、ダイヤの7が選ばれなかったら、気落ちしないで、「あ、そうそう、やっぱりよく切った5枚を使ったほうがいいですね」などと言って、この5枚をデッキに戻して、赤裏のダイヤの7もどこか遠くに配置しておいて、まったく別の5枚で、上の手順をそのまま演じるようにします。こんなふうに偶然に頼るのは気が向かない、というひとは、そもそも手品に向いてません。
- ③メンタル・フォースのバリエーションですが、選ばれやすい別のカードのバックアップ・システムを作っておく手はあります。たとえば、ヒンバー・ワレットの片面それぞれに、2Hと9Cを入れておいて、あらかじめテーブルの上に出しておくなどの工夫です。ただし、まったく別の手品をすることになるわけですから、解決法とは言えないかもしれません。

3. マニアっぽく

ということで、以下は、私が演じている「オフカラー」です。もちろんやり過ぎですが、読むと一度は演ってみたくくなりますよ。それがマニアです。

[準備]

- ①赤裏のデッキ 1組。
- ②青裏のカードを5枚。カードはなんでもかまいません。ただし、同じカードは、赤裏のデッキから除いておきます。また、この5枚は、何のカードか覚えておきます。
- ③5枚の青裏を赤裏デッキのトップに置き、青裏のケースに入れておきます。

[やり方]

- ①青裏のケースから、デッキを取り出します。トップの5枚は青裏ですから、何気なく少し広げて、あたかもデッキ全体が青裏のような印象を与えます。青裏です、などと言ってはいけないのは言うまでもありません。スリップ・カットしてリフル・シャッフルするといいいのですが、ここでは、もっと簡単に表向きに右手に持って左手へヒンズー・シャッフルしながら、ときどき右手をひっくり返してトップの青裏を見せるか、あるいは、トップの5枚だけを上手に繰り返しオーバー・ハンド・シャッフルするようなことで、デッキ全体が青裏であることを客に印象付けることにします。
- ②シャッフルしたら、左手にデッキを裏向きで持ちます。「トランプは52枚あります。その中でお好

きなカードの名をなんでもいいですから一枚あげてください。どんなカードでもかまいません」と言います。客が言ったら、「本当にそれでいいんですか？52枚もあるんですよ。あとで後悔しないように、もう一度考え直したらどうですか？いまならまだ間に合いますよ」と言います。

- ③客の言ったカードが、万が一、準備した青裏の5枚のうちの1枚だったら、奇跡が起こります。デッキ全体を表向きにして、一回カットします。これで、青裏の5枚はデッキの中央付近になりました。デッキを表向きでテーブル上にリボン・スプレッドして、客の言ったカードを探して抜き出します。まだ表向きのままです。残りの4枚の青裏のカードより、2、3枚上のところでカットしながら再びデッキを集めます。まだ表向きです。青裏の4枚は、デッキのトップ(この場合は下になっています)から3枚目付近にあります。デッキを右手で上から持って、テーブルに裏を擦るようなジェスチャーをします。「こうすると、トランプの裏の色が変わるのです」と言って、デッキ全体をひっくり返し赤裏に変化したことを見せます。そのままテーブル上にリボン・スプレッドしますが、トップ付近の6、7枚は広がらないように注意します。デッキが赤裏に変わったので客は驚きます。
- ④「すべてのトランプの色が変わりましたが、あなたが選んだこのカードだけは……」と言って、客の選んだテーブル上の表向きのカードを取り上げて裏向きにします。青裏です。「青いままなのです。不思議ですね」と言って終わります。
- ⑤客の言ったカードが、準備した青裏の5枚以外のカードだったら、まず、デッキを表向きのまま、数回リフル・シャッフルします。青裏の5枚のうち1枚だけをデッキのトップに残し、あとはシャッフルしてしまいます。デッキを表向きにテーブル上にリボン・スプレッドして、まず、客のカードを探して抜き出します。表向きのままです。次に、散らばった青裏のカードの4枚を探して抜き出します。「あなたのカードにさらに4枚のカードを加えて面白いことを行ないます」と言います。
- ⑥客のカード(仮に5Hとする)を一番上にして、抜き出した5枚を表向きのまま重ねます。デッキをそろえて、裏向きのまま左手に持ちます。このとき、トップ・カードの下に左小指でブレイクを作っておきます。右手で、表向きの5枚をデッキの上に一旦置きます。右手でブレイクから上の6枚を取り上げます。同時に左手は手首を回転させてデッキを表向きにします(図113)。つまり赤裏が見えないようにするのはこのためです。デッキはそのままテーブルの上に置きます。



図113

⑦残った6枚のカードで、「ひっくり返るカード」を演じます。最後に、客のカードだけを表向きで残し、残りのカードは表向きで、テーブルの上に表向きで置いてあるデッキの上に置きます。置いたら、デッキを右手で上から持って取り上げ、上から3、4枚のところダブル・カットします。これで、トップに再び青裏のカードが来ましたから、デッキ全体を裏向きにしてテーブルの上に置きます。青裏です。客に、「あなたの選んだこのカードだけが特別で、いつもひっくり返っていましたね。でも、このように1枚だけだと裏向きにひっくりかえることもできませんから、いったいどうなると思いますか？」と訊ねます。客の答えを待たずに、ひっくり返して赤裏であることを見せながら、「色が変わるのです」と言って終わります。

4. インポッシブル・トウイスト

これは、単売品です。香港の Zenneth Kok というお兄ちゃんが考案して、アメリカで売り出されました。25ドル(約3000円)で、いまでも売っています。私は、こういう新製品を定期的にたくさん購入するのですが、そのほとんどは開封もせず、ダンボールの大きな箱に入れて収納場所や部屋の片隅に置いてあります。これもそのひとつで、ちょっと奇抜な色のパッケージだったので、買ったのは覚えてましたが、セロファンに包装されたままでした。

開けたのは、ひよんなことから、別の人が演じているこの商品の実演を見たからです。驚きました。ちょっと手つきに胡散臭いところがありますが、4枚のカード(たとえば、4枚のキング)が、オーバーラップして重ねたまま、特別の動きも技法もなしに、1枚ずつ裏向きになっていくのです。最後は4枚とも裏向きになって、しかもその4枚をひっくり返すと、すべてエースに変わっています。エースは1枚ずつバラバラに離して裏表を見せることができます。トウイステイング・カードとしては、ほぼ完璧な現象です。

実演を見てから、急いで記憶にあったパッケージを探し、ペーパー・ナイフでセロファンを剥がしました。最近の流行で解説はビデオです。説明書はありません。これにカードが付いています。単売品ですから、トリック・カードが付いていることは想像していました。

複雑な心境です。現象も演技も素晴らしく綺麗なのです。ビデオは、Zenneth 本人の演技で、さすがに考案者は上手です。しかも、演ってみると、かなり練習の必要なことがわかって、それはそれで満足度が高くなります。それにしても、この現象を行なうのにトリック・カードが8枚も付いています。具体的には4枚のダブル・フェイスと4枚のダブル・バックです。さらに、これにラフ加工が施されています。単売品として、25ドルの価値は十分にあると思いますが……。

私の心境が複雑だったのは、いったい、これをどんなふうに演じるのだろうか？ということです。この手品は、デッキからカードを出して演じることもできないし、最後の4枚のエースでほかの手品を演じることもできません。いきなり、4枚のカードを示して、トウイステイングし、最後に4枚のエースになって、そのままポケットにでもしまうしかありません。これは、なかなか辛いことです。見ているひとは誰もが、「ああ、特別な仕掛けのあるカードなんだな」と思います。そんなふうになると、ゴードン・ビーンとラリー・ジェニングスの秀作「リミテッド・エディション」だって、そうじゃないかと言われるかもしれませんが、あれを見て、カードに仕掛けがあると考えるひとはほとんどいません。

これは大きなちがいです。

そういう意味では、まさに「インポッシブル」(不可能)なのです。でも、面白いから購入されて演ってみられることをお勧めします。

5. 目から鱗のトウイスティング・ザ・エーセス

今回は、もともと「ひっくり返るカード」と題して、トウイスティング・ザ・エーセスを扱おうと思っていたのですが、その歴史を紐解くために、マーローのタッチ・ターンに遡ったところで足踏みしてしまいました。したがって、トウイスティング・ザ・エーセスそのものは、このパート3が今回で終わりますので、このあとに企画しているカード・マジック専門誌“aficionado”で、じっくり扱うことにします。参考までに、私が、これまで目から鱗が落ちるような思いで驚いたトウイスティング・ザ・エーセスが2つあります。それは、Lee Asher のものと Guy Hollingworth のものです。さきの、インポッシブル・トウイストも、後者に影響を受けた、と Zenneth Kok 本人がビデオの冒頭で言っていました。

左手の枚数(コイン当て)

麦谷真里

(はじめに)この手品は、もともとスライディーニの原案です。原案はダイム(10セント硬貨)を使いますが、この大きさの適当な日本の硬貨がないために、どうも日本では演じるひとが少ない傾向にあります。かつ、コイン・マジックの好きなひとは、どうしても技術・技巧の必要な手順を好みますから、この作品のように、サムチップを使ったりするものは敬遠しがちでした。今回も、これを読んで、なんだサムチップか、と読み過ごしてしまうひとがいるかと思い、冒頭にスライディーニと書いたのです。読んで感じる以上にいい手品です。演ってみて客の反応に接すると、さらに、いい手品だということがわかります。

ここでは、ダイムの代わりに50円硬貨を使います。ダイムに比べると大きいし、何よりも厚いので、原案では6枚使いますが、ここでは5枚にしました。

[現象]演者は、5枚の50円玉をひとつずつ左手の中に入れて行きます。最後に、客にコインの場所を訊ねると、客はずっと見ていたので左手だと答えますが、コインはいつの間にか右手から出てきます。

[必要なもの]

①50円玉 5枚。

②大き目のサムチップ 1個

サムチップの大きさは、実際に50円玉を入れてみて決めます。もし、サムチップが小さくて4枚ぐらいしか入らなかったら、無理をしないで4枚で演じてかまいませんが、できれば、コインの数は

多いほうがいいです。

[やり方]

- ①空のサムチップを右手の親指に嵌めておきます。この場合、自分がサムチップを嵌めているんだということを意識していれば、自然と、右親指を無防備に観客の目に晒すことはなくなりますから、それ以上に注意して親指をことさら曲げたりする必要などはありません。
- ②用意した5枚の50円玉を客の掌に置きます。置いたら、右手の人差指で、「1、2、3、4、5枚ありますね」と数えながら確認します。このときも、親指にサムチップが嵌めてあるわけですから、親指が人差指の陰になるようにして、手の動きに注意します。
- ③客に向かって、「50円玉を1枚、私の左手に置いてください」と言いながら、左掌を上にして差し出します。客が50円玉を1枚置いたら、左手を軽く握ります。ここで、いかにもスライディーニらしいことを訊きます。「何か怪しいところがありますか？50円玉はまだここにありますよ」と言って、左手を開いて再び50円玉を見せます。しかし、これはスライディーニだからふさわしいジェスチャーであって、私(麦谷)などはとてもできませんから、通常は、「50円玉が、確かに左手にあることをもう一度確認しておきましょう」ぐらいの台詞が適当です。
- ④次の動きは重要です。開いた左掌の上の50円玉を右手の人差指と中指とで挟んで取り上げます(図114)。当然親指は下になっています。



図114

- ⑤このまま、右手でコインを上を持ち上げつつ、左手を甲が上になるように手前に回転させます。この瞬間、右手の親指がちょうど左手の掌に当たる位置に来ますから、このとき、右親指のサムチップを左手でスティールします(図115)。左手は、その回転の動きを止めないで、そのまま手前に回転させながら、左拳を軽く握ります。一方、右手は、上げたコインを客にちょっと示し、このコインを、再び、右手の親指と人差指とで持ち直します。以上の動きは、止まることのない一連の動作です。また、演者の目は、コインを追っています。観客からは、左手を開いて確認した50円玉を右手の指先で取り上げて示し、同時に左手は空のまま、ただ、握り拳を作ったように見えなければなりません。



図115

- ⑥握った左拳の縁は親指と人差指の一部で覆って、サムチップの縁は隠しておきます。また中は暗くて、すぐにサムチップがあると気付くひとはいません。そこで、軽く握った左拳を示しながら、そこに右手でつまんでいる50円玉を入れます(図116)。

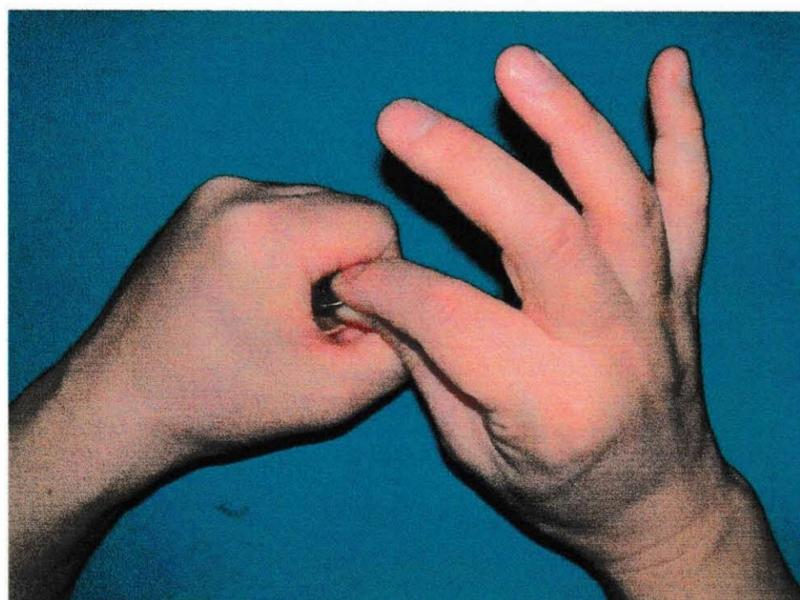


図116

- ⑦続けて、さらに3枚の50円玉を客から受け取り、左手の拳(サムチップ)の中に入れます。これは、コインを持った親指と人差指を少し深く左拳の中に入れるようにします。この入れ方は、最後に右親指でサムチップを抜き取る際の準備行動でもあります。そして、客に向かい、「これで、左手には何枚の50円玉が入りましたか?」と訊ねます。4枚です。
- ⑧あと1枚残っていますから、その最後の1枚を客からもらって、左手の拳に、それまでと同様に入れますが、このときは、右親指を強く押し込んで、サムチップを嵌めてしまいます。ここからが大事です。サムチップを嵌めた右親指を左拳から抜くではありません。右手はできるだけ動かさず、むしろ左手を緩めて左側に手首を回転させながら起こし、その過程でサムチップが右親指に残る感じです(図117)。左拳を起こしたら、やや上に掲げて、客に向かい、「いま、合計何枚の50円玉がこの中に入っていますか?」と訊ねます。客は5枚と答えます。すぐに続けて、「その5枚の50円玉が、もしポケットから出てきたら不思議ですか?」と訊ねます。

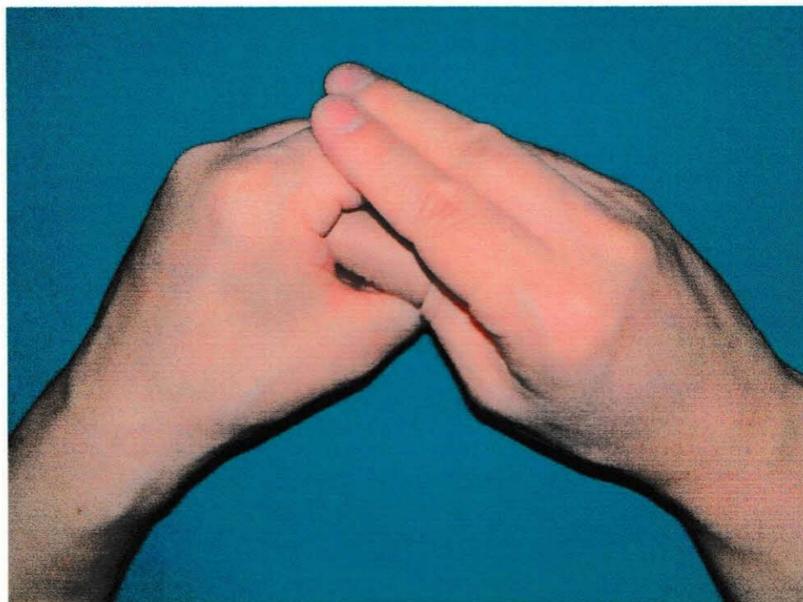


図117

- ⑨客が頷きますから、「私も不思議ですよ」と言って笑います。そして、「もちろんポケットにはありません」と言いながら、右手をサムチップの親指の先端だけが客の方を向くようにして何気なく空であることを見せてから(図118)、上着の右ポケットに入れ、そこでサムチップを脱いで、中の50円玉を右手の中に握ってから、拳を出す用意をします。

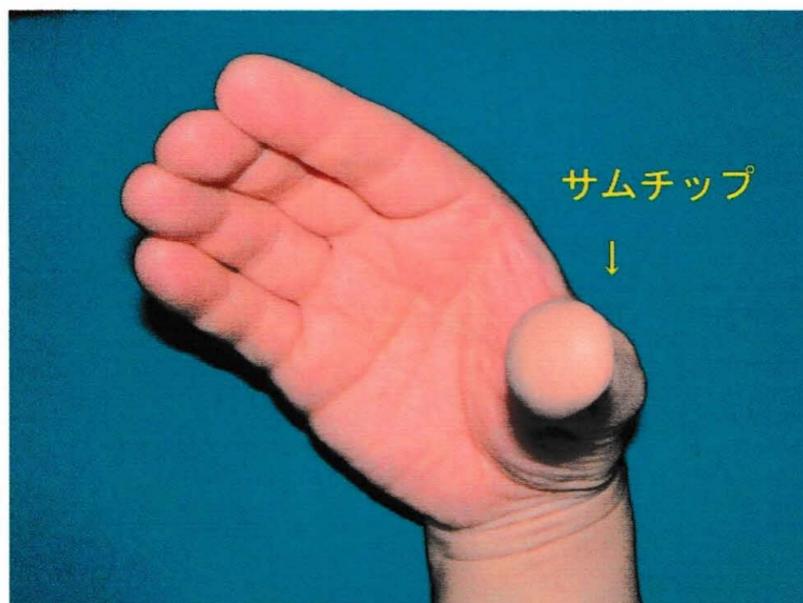


図118

- ⑩「50円玉が、まだ左手の中にあるかどうか賭ける気がありますか？」と訊きますが、答えを待つ必要はありません。ここで、右手も拳を作ってポケットから出して、左手の拳と並べます。「このままだったら、誰でも左手にあるとわかってしまいますから、ちょっと複雑にしましょう」と言って、両手を一度交差させてから、再び元通りに戻します。ただし、交差するとき、あまり両方の拳を近づけないようにします。そうでないと本当に疑われます。
- ⑪客に、どっちに50円玉があるか訊いてから、ゆっくりと左手を開いて空であることを見せ、右手を開いて、5枚の50円玉を見せ、それを客の掌にジャラジャラと空けて終わります。

[コメント]50円玉は交換しないわけですから、客に何かイニシャルでも書かせてもいいかと思えます。1円玉は、大きさはいいのですが、やはり迫力にかけます。

最近の手品用具について

このテーマを扱います、と前々号のNo. 8でちょっと書いてから、前号はついに紙数が尽きてしまって何も書けませんでした。今号で取り上げないと、パート3が終わってしまいますので、約束が果たされないこととなります。ということで、今回は、始めからこの項のために2ページ確保しておきました。

1. マルチンカの椅子

いきなりタネを書きます。木製の普通サイズの椅子がシェル(!)になっているのです。驚くべきことです。よくできています。シェルが抜けるところや、シェルを被せるところを見ただけでも不思議に思えます。着脱はきわめてスムーズです。値段は1500ドル(約18万円)ですが、家に飾っておいてもなかなかいい椅子なので、私自身は安いと思います。こういうのをクラフトマン・シップというんでしょうか? どう転んだって自分では作れません。問題は、こんなものどうやって手品に使うのか? ということです。実は、椅子が一脚やっとなるだけの折り畳める四角いスクリーンが付いてきます。これを四角い筒にして被せると、椅子がすっぽり隠れます。上下は開いていますから、上部からシェルを取り出すと、見ている観客には筒の中が空に見えます。そこで、筒を上にあげるか、あるいは、上部から手を入れるかすると、まったく同じサイズの椅子がもう一脚現れます。まあ、不思議でしょうね。でもそれで終わりです。もうひとつ、椅子が逆さまになるという使い方もあります。

松尾さん(通称:マリック)は、筒の中で、椅子が逆さまにひっくり返るほうの演出で演じていました。それも一興ですが、彼は、結局最後に二脚とも出していたので、見ている客は、ああ、やっぱり2つあったのかと、狭い筒の中でひっくり返る現象には驚かずに変に納得してしまいますので、最後まで一脚のほうがいいように思いました。

2. グラス・ブレイキング・テーブル

これはまさに、名前のままの手品です。テーブルの上に置いてあるグラスが、マジシャンの合図(念力?)とともに壊れるという現象です(図119)。



図119

テーブルに仕掛けがあるなどと思っていなかった人には夢を毀してごめんなさい。超能力や衝撃波でガラスを毀しているのではありません。テーブルの下から恐ろしいハンマーが出てきて碎きます。かつては1000ドル以上もしていました。ドイツ製のワイヤレス・リモコンで操作するものは、850ドル(約10万円)と990ドル(約12万円)との2種類があります。2つの違いは、ガラスを1個破壊できるか、2個破壊できるかの違いです。ただ、それだけの現象ですので、アマチュア・マジシャンとしては、購入するのを躊躇するものがあります。ところが最近になって、アルゼンチン製のものが270ドル(約3万円)で市場に出てきました。ただし、これはリモコンではありません。したがって、ガラスが割れるタイミングにマジシャンのほうが合わせなければなりません。それは、練習すればかなりうまくいきますので大丈夫です。また、ガラスの破片から防護するためのカバーも付いてきませんから、そういうものは自分で別途用意しなければなりません。

この用具の問題は、実は、ほかのところにあります。なんといっても、これを演じるためには、このテーブルが要るのです。アマチュアの場合、まさかこれだけを演じるということはありませんので、このテーブルにガラスを載せたまま、ずっとステージなどに放っておくわけにもいきません。テーブルの安定性はかなりいいので、上にいろいろのものが置けそうですが、なにしろハンマーの出る隙間がありますし、テーブル・トップは、このため固くはないのです。第一、テーブルに近づいたときに誤ってスイッチを押してしまわないかと心配になります。一度、スイッチを押してしまうと、観客の前での再セットはできません。悩むところです。

似たような用具で、手に持った電球を割るものもあります。これと組み合わせると、超能力ショーができるかもしれません。そっちのほうは53ドル(約6000円)で購入できます。

3. タイム・マシーン・ウォッチ

いくつかのディーラーの広告で同じものを見ましたから、かなりあちこちで売られているものです。何の変哲もない腕時計ですが、時計本体ではなく、時計のバンドを持って、マジシャンの任意の時間に針をセットすることができます。それも、何時何分とかなり細かくできます。しかも、このメカニズムは、およそ客には気付かれませんが、なかなかの秀作です。95ドル(約11000円)ですが、似たような現象を提供するほかの時計に比べて、決して高くはないと思います。

4. ノートパッド・サプライズ

これも、かなり宣伝されていたので、すでに購入された方もいらっしゃるかもしれません。ノートパッド(メモ用紙)に顔を書いて、その目と口がアニメーションのように動きます。演技のあと、そのメモ用紙を破って観客に手渡すことができる、と言うものです。58ドル(約7000円)ですが、さらに大きなタイプのものも最近発売されました。これは、誰かの演技を見て、たぶんこんなタネだろうと想像すると、ほぼその通りのタネです。ただ、自分で作るのはやっかいです。こういう手品が好きで、やってみたいひとは、自分であれこれ考えずに買われたほうがいいでしょう。

**** 以上の商品を購入なさりたい方は、お近くのディーラーにご相談ください。**



PART III はこれで終了です。

パート3を購読していただいた方々には、本当に長い間ありがとうございました。パート3の第1号を出したのが1997年5月でしたから、第10号が出て完結するまで、なんと6年もかかったことになります。この間、私の返金の申し出に対して、いつまでも待つから刊行を続けてくれ、とおっしゃっていただいたみなさんには、本当にご迷惑をおかけしました。ここで改めてお詫び申し上げるとともに、長い間待っていただいた寛容と忍耐に心から感謝を申し上げます。

すでにご存知の通り、新しく刊行している **Part4** のほうは順調で、すでに、本誌が **No.10** まで、クラシック・エディションが **No.4** まで刊行されています。パート3との内容の重複は一切ございませんので、ご興味のある方は、メールもしくははがきでお問い合わせください。すでに在庫のない号もございますので、いきなり送金されることなく、必ず事前にご相談ください。

これで、当 **masquerade** の定期購読はすべて終了いたしました。現在は、予約購読制をとっていますので、もちろん一定期間ごとに刊行しなければならないわけではありますが、事前にお金を受け取ってはおりませんので、購読者の方々にご迷惑をおかけすることはありません。

今後は、パート3に割いてきた時間と労力を、新しいカード・マジック専門誌“**aficionado**”の発行に費やそうと思っています。できるだけ負担にならないように、12～16ページ前後の薄いもので、かつモノクロ印刷にしようと思っていますが、詳細は第1号ができた時点で改めてお知らせいたします。

masquerade part3 No.6-No.10 の合本

No.1-No.5 に引き続き、**No.6-No.10** の合本を限定販売いたします。もともとのパート3は、すべてモノクロ印刷ですので、カラー印刷でのものは合本しかありません。また、**No.1-No.10** を通しての合本はありませんのでご注意ください。

1. **Part3 No.1-No.5** 合本 カラー版:10000円、モノクロ版:7000円 (〒390円)
2. **Part3 No.6-No.10** 合本 カラー版:10000円、モノクロ版:7000円 (〒390円)

ご注文・連絡は、郵便かメールでお願いします。(2003年1月)

雑誌が先に届きます。支払いは後です。同封の郵便振替か指定の銀行振込でお支払いください。現金書留はご容赦願います。1月から住所がちょっと変わりました。ご注意を。

郵便の送付先: 〒142-0064 東京都品川区旗の台3-15-1-230 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com